

市民社会をつくる



ボランティア フォーラム

TOKYO 2016

私たちがつくる あしたのピース

2016年

2月12日(金)-14日(日)

会場：飯田橋セントラルプラザほか

主催 東京ボランティア・市民活動センター

企画運営 市民社会をつくるボランティアフォーラムTOKYO2016実行委員会

後援 東京都

特別協賛 中央ろうきん社会貢献基金

東京ロータリークラブ

公益財団法人 原田積善会

株式会社三菱東京UFJ銀行

協賛 NECネットエスアイ株式会社

公益財団法人 損保ジャパン日本興亜環境財団

トヨタ自動車株式会社

NPO法人 モバイル・コミュニケーション・ファンド

協力 株式会社ガイア

全労済

東京新聞社会事業団

報 告 書

はじめに

東京ボランティア・市民活動センターでは、「ボランティアまつり」「ぼらんていあ・めっせ」「ボランタリーフォーラム」と名前を変えながらも、開設当初より、ボランティアや市民活動に関わる方や関心のある方が集い、つながる場をつくってきました。

「私たちがつくる あしたのピース」というテーマの基、市民社会をつくるボランタリーフォーラム TOKYO2016（以下「Vフォーラム」）は開催され、33 のプログラムが行われました。

本報告書には、それぞれのプログラムの様子や、プログラムを通して伝えたかった実行委員・サポーターの想いや声、実施しての成果や課題が掲載されています。

また、職種や年齢も異なる多様な実行委員会メンバーが、議論を重ねながら、Vフォーラムの形を作り上げてきた記録も同時に収められています。

より多くの方が本報告書を目にすることによって、誰もが自分らしく生きることができる豊かな社会を築いていくための、一人ひとりにとってのきっかけや新たな一歩となることを願っています。

東京ボランティア・市民活動センター

もくじ

はじめに

第1章 企画編

- ボランティアフォーラムができるまで・・・・・・・・・・・・・・・・・・6
 - 《市民社会をつくるボランティアフォーラム TOKYO とは？》
 - 《実行委員会について》
 - 《企画・運営のあゆみ》
 - 《分科会企画案の公募》
 - 《ボランティアフォーラム TOKYO2016 プレ企画》

第2章 実施編

- 市民社会をつくるボランティアフォーラム TOKYO2016 概要・・・・・・・・・・16
- 各プログラム実施報告
 - 1 『社会福祉法人』は変わるか！？ ●18
 - 2 沿線でつながろう！～地図で見るとなり街のボランティア～ ●20
 - 3 企業人ボランティア交流会 ～会社の内外でネットワークしよう！～ ●23
 - 4 オープニング ～あしたのピースって？～ ●25
 - 5 『ゼノ・かぎりなき愛に』映画から考える平和の大切さ ●27
 - 6 現代の貧困～まずは知ることから始めよう～ ●30
 - 7 “罪を犯した人”の背景をひもとく！
～その背景から、わたしたちの地域や暮らしを考えてみよう～ ●32
 - 8 健聴者が気付かないコミュニケーションの壁 ～聴覚障がい者の社会環境を考える～ ●35
 - 9 学生に「また来たい」と言われたい
～学生×地域×大学で考える学生目線のボランティア～ ●37
 - 10 「東日本大震災から5年」そしてこれから ●40
 - 11 パレスチナ問題を若者たちと語り合いましょう ●43
 - 12 物質的豊かさと心の貧困 ～ツーリズムから見る現在社会～ ●46
 - 13 「はじまりの物語」～セルフヘルプグループから「私たち」へのメッセージ～ ●49
 - 14 「do-ing（動員）」の力学を知ろう ～自主性ある地域活動をめざして～ ●53
 - 15 ボランティアを通じて学生の生きる力（社会性・自己肯定感）を育てる ●56
 - 16 交流会 ●59
 - 17 私の、私たちにとっての家族のかたち
～「家族」って何だろう？ 映画『うまれる ずっと、いっしょ。』から～ ●61
 - 18 非営利組織とお金 ～出し手と受け手の「意志」をひとつに～ ●63

- 19 2020 年、東京パラリンピックに向けたムーブメント ●66
- 20 みんなで作ろう！「明日のピース」
～障害のある方々とアート作品をつくってみよう！～ ●69
- 21 外国にルーツを持つ子どもたちのキャリアを考える ●71
- 22 “家族のかたち” “地域のかたち” の今 ●73
- 23 ソーシャル界の“スティーブ・ジョブズ” ここにあり
～IT テクノロジーによる社会課題解決～ ●75
- 24 多様な非営利組織で働く多様な人びと ～NPO の価値を問う～ ●77
- 25 “きょうだい” Café ～語り合おう、障がい者のきょうだいのこと～ ●80
- 26 中学生・高校生、施設・団体と地域をつなぐ ●82
- 27 クロージング ～みんなでつくる あしたのピース～ ●84
- 28 ごみ拾いから見る社会課題 ～夜の新宿・歌舞伎町へ～ ●86
- 29 地域と子どもと育ちあう場 ●88
- 30 「靖国神社」を歩こう ●91
- 31 「想いをかたちに」 出会いの広場 ～民間助成金相談～ ●93
- 32 ふれあい満点市場 ～NPO・NGO の作品展示販売～ ●95
- 33 Open Café ●97
- 〔作品展示〕 みんなで作ろう！「明日のピース」
～障害のある方々とアート作品をつくってみよう！～ ●99
- 〔作品展示〕 2020 年、東京パラリンピックに向けたムーブメント ●100

プログラム別参加者数一覧	●101
実行委員会名簿	●102
プログラム別担当者一覧	●103

協賛・協力団体

<第 1 章>

企 画 編

ボランティアフォーラムができるまで

●市民社会をつくるボランティアフォーラム TOKYO とは？

市民社会をつくるボランティアフォーラム TOKYO（以下、「V フォーラム」）は、私たちの暮らしに関わるさまざまな「社会課題」※に焦点をあて、それを共有し、誰もが自分らしく生きていくことのできる豊かな社会を築くために従来のしくみ、地域性、価値観を超えてあらゆる市民と一緒にできることを考える集いの場です。2004 年 2 月より開催され、2016 年開催時で 12 回目を迎えました。3 日間を通して毎年約 1000 名が参加しています。

多様化・複雑化している暮らしにおいて、現在の社会のしくみでは対応しきれないような社会課題やニーズは増えています。それらに対して柔軟に対応し、ともに解決していく、ボランティア活動や市民活動への期待は、ますます高まっています。

V フォーラムでは、テーマごとに社会課題の解決に向けた活動の実践を聞きながら、直面している課題や思い・関心事を伝えあい、共感しあうことをきっかけとして、具体的な取り組みにつながるためのヒントを得たり、実際の活動への第一歩となっています。

※社会課題の分野は、環境保護、社会福祉、まちづくり、社会教育、国際協力など多岐多様に渡る

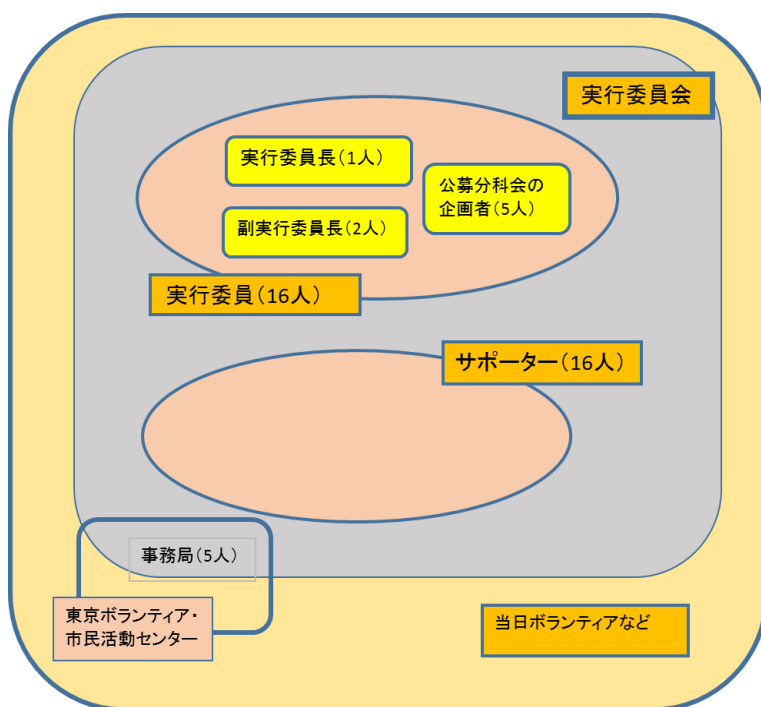
＜市民社会をつくるボランティアフォーラム TOKYO 開催状況＞

回	開催年	全体テーマ	カテゴリー	参加者 延べ数 (人)
1	2004	「つなぐ つながる つなぎあう」	なし	671
2	2005	「つなぐ。つながる。つなぎあう。」	一日コミュニティスクール、災害から生をみつめる、ITがつなぐ、街を発見する足たち、アートがまちに作用する、ホームレス問題と私たちの暮らしを考える、私にとってのボランティア、介護をかんがえる、社会の仕組みを考える、虐待を防ぐ	1,238
3	2006	「つなぐ、つながる、つなぎあう。」	体験ボランティア入門編、ブラッシュアップNPO/NGO、社会の課題最前線！、アート、社会のしくみ	1,062
4	2007	「気づく、動く、変える、市民の力。」	格差社会、制度・仕組みの欠陥・ひずみ、社会の課題最前線、ボランティア	933
5	2008	「危機（クライシス）に立ち向かう市民活動」	福祉制度の崩壊から創造へ、環境破壊と創造、ボランティア復活への道、暮らしをみつめて	1,551
6	2009	「今、市民として“生きる価値”を問う」	社会の仕組みと制度、安心して暮らせる地域社会づくり、「市民社会」の担い手づくり、お金で買えない価値	1,887
7	2010	「希望は市民（わたしたち）が創る」	つながる、発信する、考える、育てる	1,516
8	2011	「市民（わたしたち）が創る公共～紡ぎあう地域の絆～」	社会に必要な仕組み、地域とのつながり、育ちあう市民、ボランティア	898
9	2013	「試される市民力（わたしたちのちから）」	つながり、生活・くらし、若者の市民力、ボランティア	1,276
10	2014	「気づく・築く 市民力（わたしたちのちから）」	生活・くらし、地域・居場所、若者の市民力、ボランティア	886
11	2015	「今を想い、未来をつくる」	グローバルとローカル、暮らしと居場所、ボランティアと組織運営、いまと未来	1,102
12	2016	「私たちがつくる あしたのピース」	なし	1,206

*2012 年は「第 20 回全国ボランティアフェスティバル TOKYO」開催のため未実施

●実行委員会について

市民社会つくるボランティアフォーラム TOKY02016 運営体制



実行委員会：全体運営の方針決定に関わる。また、分科会の企画立案をしながら、サポーターや事務局、関係団体を知識・経験・情報などでつなぐコーディネーターの役割も担う。

サポーター：一つの分科会を準備するにあたってサポートを行う。

事務局：実行委員会で話し合ったことが形になるように、情報伝達・調整・資料作成などを行う。

Vフォーラム実施にあたり「実行委員会」を立ち上げました。さまざまな分野・地域から集まったメンバーで組織され、それぞれがボランティア・市民活動の中で直面している社会課題や関心事とそれらに伴う想いをもとに話し合いを重ね、当日の運営体制やプログラムづくりなどを進めました。（※実行委員会のメンバー構成はP102を参照）

また、実行委員会の前段階として、これまでのVフォーラムを振り返りながら、今後の実行委員会およびVフォーラムの概要を考えるための「準備会」を3回開催しました。

全10回の実行委員会のうち、9回は、Vフォーラム当日に向けた話し合いです。最初に全体テーマについて決定をするとともに、特に分

科会づくりに時間をかけていきました。分科会で取り上げたいテーマや関心が近いメンバー同士でグループをつくり、意見交換をしながら企画を立て準備に取り掛かりました。分科会づくりのステップは、主に①自分自身が問題意識のあるテーマを出しあって整理する、②分科会の大枠を決める。

③企画した内容をもとに新たなサポーターの参加を呼びかける（あるいはサポーターと共に企画を考える）。④各分科会の詳細決めと準備（出演者への依頼、パンフレット・資料作成など）、⑤参加者の募集、⑥当日の運営、となります。同時にその他プログラムの企画や準備、当日運営体制の検討や役割分担なども行いました。

また、今年は「ファンドレイジング部」・「広報部」・「カフェ部（プレ企画部）」の3つの部会を設け、「資金調達強化」や「専用ホームページの魅力や発信の強化」、「当日の集客力アップ」への取り組み検討を有志で重ねました。実行委員会と同日開催のため毎回わずかな時間での検討となりましたが、それぞれの項目について改善が見られるなど、一定の効果がありません（カフェ部についてはP12を参照）。

Vフォーラムで目指すものは、既存の仕組みやサービスでは解決しきれない、さまざまな社会課題の解決に向けたボランティアや市民活動の新たな取り組みのきっかけをつくることです。実行委員会のメンバーが普段から耳にしている社会の実情や活動の実践をもとに、話し合いながら企画を進めます。そして、Vフォーラム当日では、出演者の話やワークショップなどを通じて、参加者と一緒になって考えていきます。あらゆる人が集い、知恵を絞り、つながりあうことによって、今までにない新しい考え方や新たな活動への第一歩が生まれる場になります。

また、ボランティア・市民活動に興味を持っている人や、活動してみたいと思っている人にとって、Vフォーラムは知識を蓄え新たな価値観を知る場や、第一歩を踏み出し活動を始めるきっかけとなっています。

●企画・運営のあゆみ

時 期	実施したこと	考えたこと
2015 年 5 月	準備会①②	今年の方角性、テーマ、 分科会企画案公募方法の検討
6 月	Facebook での情報配信開始 分科会企画案の公募開始	
7 月	準備会③（兼 公募選定委員会） 実行委員会①	検討事項の確認、分科会公募企画案の 選定 自己紹介、全体テーマ検討、分科会テ ーマアイデア出し、開催日決定
8 月	実行委員会②	サポーター顔合わせ、公募分科会企画 者顔合わせ、全体テーマ決定、分科会 テーマ・企画内容の検討
9 月	実行委員会③（部会同時開催）	分科会企画内容の検討
10 月	実行委員会④（部会同時開催） 実行委員会⑤（部会同時開催）	分科会企画内容の検討 全体のスケジュール検討、パンフレッ ト内容検討、全体会・交流会企画検討
11 月	実行委員会⑥（部会同時開催） パンフレット作成	分科会スケジュール決定、パンフレッ ト内容検討、全体会・交流会企画検討
12 月	実行委員会⑦（部会同時開催） 参加者募集開始	各種進捗状況確認
2016 年 1 月	実行委員会⑧（部会同時開催） 実行委員会⑨（部会同時開催） 当日運営準備、資料作成 各分科会事前打ち合わせ	当日運営体制確認、必要備品の確認、 報告書の検討 当日運営体制確認、必要備品の確認、 各分科会配布資料の作成
2 月	市民社会をつくるボランタ ーフォーラム TOKYO2016 の開催	
3 月	実行委員会⑩（部会同時開催） 報告書作成	振り返り、次回への引継ぎ事項の確認

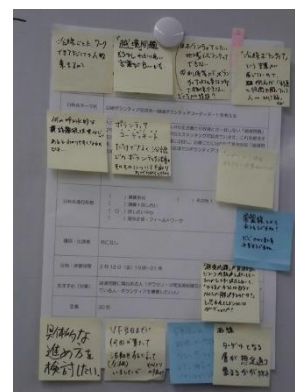
参 考	「ボランティアフォーラム TOKYO 2016 プレ企画」 (2015 年 12 月・2016 年 1 月に計 2 回開催) ※詳細は P12 参照
-----	--



＜準備会＞
今年の報告性やテーマ等について
話し合いました



＜実行委員会＞
分科会の詳細や、フォーラム全体の
運営について考えていきました。



＜実行委員会＞
分科会については、みんなで意見
を出し合い修正を重ねながらつく
ていきました。



当日の運営① 総合受付



当日の運営② 備品準備



＜ボランティアフォーラム当日ミーティング＞
緑のスタッフジャンパーを身にまとい、エイエイ
オー！

分科会企画案の公募

<開催目的>

昨年に引き続き、分科会企画案の公募を行いました。これは、過去のVフォーラムを振り返り、参加者から「話し足りない」「実行委員会として企画に参加したい」という声があったことなどを踏まえ、企画段階からより多様な人々が関わることをできるようすることで、これまでの委員会の雰囲気や考え方に新しい風を入れ、より幅の広い社会的テーマを分科会として取り上げることを目指した試みです。決定した企画案を基に、実行委員会で企画者とメンバーが一緒になって内容を検討し、新たな社会課題の発信、出会いや発見を体感することをねらいとして実施しました。

<募集概要と実施結果>

【内容】

- ・ ボランティアフォーラムのプログラムの一つとして分科会企画案に基づいた社会課題の発信機会の提供
- ・ 2016年2月12日（金）～14日（日）の内1コマ
- ・ 予算は、30,000円まで など

【条件】

- ・ 実行委員会への参加が可能であること
- ・ 40名定員の会場内で実施できる規模の企画
- ・ 企画案をもとに、実行委員会の中で一緒に議論・検討し、企画を作り上げ、実施に向けて協力していただけること など

【応募方法】

- ・ 所定の企画書（A4サイズ2枚）に記載の上、郵送・メールにて申込

【応募期間】 2015年6月9日（火）～7月8日（水）

【結果通知】 2015年7月21日（火）

実施結果

- ・ 応募件数 6件
- ・ 採用件数 5件
- ・ 応募者所属内訳

市民活動団体	2人
ボランティア・市民活動推進団体	2人
企業人	1人
大学院生	1人

選考のポイント

- ・ 社会課題をテーマにした企画である
- ・ 広く一般を対象にした企画である
- ・ 多様な市民の参加が期待される企画である
- ・ 本フォーラムで波及効果が期待される企画である
- ・ 他団体との連携・協働が求められるような企画

<公募から実施された5つのプログラム 企画者の声をまとめてみました>

もともと京王線沿線のボラセン関係の人々が集まって連携を検討していた会でしたが、先に進むには何か具体的なアクションが必要と考えていたところ、ボランティアフォーラムの存在を知り、ここに関わることで企画を促進・PRするチャンスと考え、応募しました。実行委員会では課題がわかりにくいなどの客観的な意見だけでなく、他の実行委員やサポーターの協力もいただきました。当日は京王線以外の沿線の方も集まり、参考になるアイデアもいくつか出ました。ここで経験や議論を踏まえ、さらに会を継続させていきたいと考えています。

<企画> 市川徹（沿線ボラセン交流会）

※プログラムの詳細はP20参照



2 沿線でつながろう！

～地図で見るとなり街のボランティア～



8 健聴者が気付かないコミュニケーションの壁 ～聴覚障がい者の社会環境を考える～

聴覚障がい者の職場環境についての応募でした。平成 28 年 4 月改正障害者雇用促進法が施行予定ですが、聴覚障がい者の課題はコミュニケーションに由来する面が大きいので、この法改正での解決が難しく、取り組みの前進が急務だと感じています。

このフォーラムでは埋もれている課題を表面化し、継続した取り組みに転換できるチャンスがあると思います。その過程で豊かな人材とめぐり合う機会もあり、大きな前進ができたと思います。課題解決に向け、ここでの成果を求めず、取り組みをスタートさせることに注力できました。さまざまなご協力をありがたく感じています。

＜企画＞ 高橋義博（調布市市民活動支援センター）

※プログラムの詳細は P35 参照

公募からのフォーラム参加には種々の意義がありますが、最重要な点は、個人では従来解決不可能と思われていた社会問題の解決に、公募という手段で、個人レベルで挑戦できる点ではないでしょうか。遅々として進まないパレスチナ問題をどう市民に訴えるか、また、沖縄、福島、在日の方々と問題を共有し、互いに連携が取れるようにしてゆくという作業は、個人対応では、かなりの労力がかかり、成功もおぼつきませんが、今回公募に採用され大きく前進できました。今後このような市民に開かれた手法があることを、堂々と訴えてゆく決意です。

＜企画＞ 中川径治（NEC ネットエスアイ株式会社）

※プログラムの詳細は P43 参照



11 パレスチナ問題を若者たちと語り合おう



23 ソーシャル界の“スティーブ・ジョブズ”ここにあり ～IT テクノロジーによる社会課題解決～

私は日頃、性暴力をゼロにすることを目指す NPO で活動しています。活動を通じて、性暴力以外の社会課題に気付いたり、性暴力以外の困難を抱える方に接することも、少なくありません。しかし、自分の団体でそれらを取り上げることは難しいです。

ボランティアフォーラムは、「日頃の活動とは異なる分野」に、「自分とは異なる角度で活動する人たち」とともに、市民社会を考えることのできるチャンスです。また「TVAC (=東京ボランティア・市民活動センター)」というブランドを使えることも、小さな NPO で活動する者からすれば、本当に貴重でした。この経験を、今後に活かしたいです。

＜企画＞ 中野宏美（NPO 法人しあわせなみだ）

※プログラムの詳細は P75 参照

以前に一般参加した際に「素敵なイベントだなあ！」と感動し、「自分もいずれ関われたら良いなあ」なんてぼんやりとっていました。公募企画の募集がかかっているのを発見したときは、ピン！と来て即座に応募しました。実行委員会の活動を通して感じたのは、ひとつひとつの分科会に実行委員やサポーターのみなさんのたくさんの想いが注がれていることです。私自身も、楽しく愛情を込めて1つの分科会を作ることができました。このような貴重な機会を与えて下さり、ありがとうございました！

＜企画＞ 川上侑希子（東京大学大学院 教育学研究科）
※プログラムの詳細はP80参照



25 “きょうだい” Café
～語り合おう、障がい者のきょうだいのこと～

＜成果と課題＞

分科会企画案を初めて募集した昨年度は、9月の第4回実行委員会が選考の場となり、時間的な問題から、話し合いながら多様な価値観を加え企画案を高めていくというVフォーラムの特色が出しにくい分科会があったり、Vフォーラムの雰囲気や手法に慣れるまでに時間が足りないといった反省がありました。

それらを踏まえ、今年度は7月のVフォーラム準備会で企画案の選考を行い、第2回実行委員会という比較的早いタイミングから会議に参加してもらうことになりました。結果的に、さまざまな人が関わるといふVフォーラムらしさがより表れた分科会が作られ、全体の運営についても、多様な意見やアイデアが生まれました。

また、日頃は接点のなかった人も実行委員会に参加することとなり、Vフォーラムの更なる活性化にもつながりました。

一方、昨年度に比べ応募総数の減少が見られるなど、さまざまな人にVフォーラムの魅力や存在を知ってもらうための広報活動については課題が残りました。

今後は、より多くの人にVフォーラムを知ってもらうための方法について検討をし、実践していくことが求められていると感じています。

ボランティアフォーラム TOKYO 2016 プレ企画

●開催目的

ボランティアフォーラム TOKYO 2016 のプレ企画として、昨年に引き続き、交流イベントを開催しました。実行委員同士がボランティア・市民活動への想いや、知識、経験を共有し、当日のプログラムのヒントを得ること、当日に向けての意欲を高めることを目的としました。そして、さまざまな人にボランティアフォーラムを知っていただくきっかけにすることもねらいとしました。

そのため、このプレイベントでは、地域の交流スペースを借り、本フォーラム実行委員会メンバーだけではなく、広く一般に参加を呼びかけて実施をしました。

全 2 回イベントを開催し、延べ 51 名の方に参加していただきました。

なお、本プレ企画は、ボランティアフォーラム実行委員会内に設置された「カフェ部（プレ企画部）」有志によって企画・運営が実施されました。

●第 1 回 プレ企画「Christmas Cafe」

【開催日時】 12 月 9 日（水）18:30 ～ 20:00

【会場】 シェア奥沢

【ゲスト】 堀内 正弘さん（シェア奥沢オーナー）

【登壇】 鹿住 貴文さん（前ボランティアフォーラム実行委員長・現副委員長）

【参加者数】 22 名

【プログラム内容】

お料理のおいしそうな香りが漂う中、シェア奥沢のオーナー堀内さんのお話を聞き、シェア奥沢がうまれたきっかけや想いについて知りました。地域コミュニティやご縁のあった方に利用していただくというスタイルをとっており、その中から新たな出会いや企画がうまれる喜びについてもお話いただきました。

また、鹿住さんからこれまでのボランティアフォーラムの変遷や、取り上げられてきたテーマなどについて聞きました。今までの実行委員会メンバーがどんな想いでフォーラムを作りあげて来たのか、そしてこれまでどんな企画があったのかを知り、今年のフォーラムへのモチベーションがより一層上がることになりました。

おいしい料理を食べながら、実行委員メンバーは今、どんな想いをもってフォーラムに臨んでいる



のかを共有することができました。また、一般の参加者の人にも、フォーラムというイベントについて知っていただく機会となりました。

●第2回プレ企画「Voluntary Forum Cafe『あしたのピース』を語ろう」

【開催日時】 1月28日（木）18:30～20:00

【会場】 高齢者福祉施設神楽坂 1階 地域交流スペース

【出演】 竹内 哲哉さん（NHK制作局第一制作センター文化福祉番組部 ハートネットTVデスク）

【登壇】 高橋 義博さん（『健聴者が気づかないコミュニケーションの壁』担当）

栗澤 稚富美さん（『“家族のかたち”“地域のかたち”の今』担当）

中川 径治さん（『パレスチナ問題を若者たちと語り合いましょう』担当）

上田 英司さん（『外国にルーツを持つ子どもたちのキャリアを考える』担当）

【参加者数】 29名

【プログラム内容】

神楽坂に位置する「高齢者福祉施設神楽坂」1階の地域交流スペースをお借りして開催しました。「高齢者福祉施設神楽坂」は、「ご利用者はもちろん、地域の方々、神楽坂をおとずれる来訪者の方々皆に愛される施設作り」をコンセプトとしており、さまざまな団体に利用されています。



ご出演いただいたNHK制作局の竹内さんが、経験や幅広い知識に基づくさまざまな視点から質問を投げかけ、実行委員会メンバーの課題意識やフォーラムにかけたい想いなどをどんどん引き出していきました。実行委員会メンバーは新しい気づきや当日プログラムへのヒントを得ることができました。また、参加者からは「今までそういった課題があることを知らなかった」「自分には難しい」と思っていたけれど、わかりやすかった。興味を

持てた」といった声を聞くことができました。今回のカフェのお菓子は、新宿区立福祉作業所で作られているパンでしたが、どれもおいしく、お腹も心も満たされる会になりました。

●成果と課題

今年は前述のカフェ部（プレ企画）を立ち上げ、有志メンバーによってプレ企画の検討を行ってきました。実行委員会開催前の短い時間での打ち合わせや、必要に応じた別建ての打ち合わせを重ね、2回のプレ企画を開催できたことが成果でした。「実行委員会メンバー同士がお互いを知り、ボランティアフォーラムへの想いや知識・経験を共有する」とことと、「より多くの人にボランティアフォーラムを知

っていただく」ことについて、それぞれ実現できたことは良かったこととして挙げられます。

一方、プレ企画の企画・運営を行った有志メンバーに過度の負担がかかってしまったことや、「メンバー同士の交流とフォーラム当日への意欲の向上」と「多くの方にフォーラムをPRすること」を同時に目指したため、結果として2つの方向性それぞれについて、プレ企画開催の効果がどれだけ行き渡っていたのか不透明な点もあることについては、きちんと検証し次年度以降に活かしていく必要があると考えています。

●担当者・記録

《担当》	後藤 浩二（スープの会）
	志田 五十鈴（こまえボランティア・センター）
	杉村 郁雄（日本ファシリテーション協会）
	鈴木 正昭（りすこ「おおた復興支援活動連絡協議会」）
	柳澤 更沙（明治大学和泉ボランティアセンター）
	圓藤 理江（東京ボランティア・市民活動センター）
《記録》	岡部 沙耶（東京ボランティア・市民活動センター）

<第 2 章>

実 施 編

市民社会をつくるボランティアフォーラム TOKYO2016 開催概要

<趣旨>

ボランティア活動や市民活動に関心のある方々、また、実際に取り組んでいる方々を対象に「市民社会をつくるボランティアフォーラムTOKYO2016」を開催いたします。

「市民社会をつくるボランティアフォーラムTOKYO」は、私たちの暮らしに関わるさまざまな社会課題に焦点をあて、それを共有し、私たち市民にできることを考えていくためのイベントとして、2004年から開催してきました。

初回から一貫して、分野、地域、セクターを横断したボランティア・市民活動にかかわるメンバーで実行委員会を組織し、実践の中で直面している課題や思いをもとに、時間をかけてつくりあげ、新たな気づきや参加の輪を広げる機会としています。

12年目を迎える今年度のテーマは、「**私たちがつくる あしたのピース**」です。誰もが自分らしく、日々平和に暮らすことのできる豊かな社会を築いていくために、一人ひとりが大切な役割を担っていくという思いを込め、このテーマに決定しました。

社会の課題やニーズがより多様化・複雑化している中で、それらに柔軟に対応し、ともに解決していく、ボランティア活動や市民活動への期待は、ますます高まっています。

参加者のみなさんの声や思いを大切に、このフォーラムを、市民活動や市民社会を考える機会にしていきたいと考えます。みなさんのご参加をお待ちしています。

<開催概要>

テ　　マ	私たちがつくる あしたのピース
開　催　期　日	2016年2月12日（金）19：00～21：00 2月13日（土）10：00～19：10 2月14日（日）10：00～17：00
会　　場	飯田橋セントラルプラザ ほか
主　　催	東京ボランティア・市民活動センター
企　画　運　営	市民社会をつくるボランティアフォーラム TOKYO2016 実行委員会
後　　援	東京都
参　加　費	一般 2,000 円（1 プログラムのみ参加の場合は 1,000 円） 大学・短大・専門学校生 1,000 円（1 プログラムのみ参加の場合は 500 円） 高校生以下、または 18 歳未満の方 無料 ※ No.16「交流会」は、軽食代として別途 500 円（18 歳未満は 300 円）が必要です。 ※ フィールドワーク（No. 28～30）は、別途費用が必要です（交通費など）。

参加者実数 596 名

一般参加者	380 名
関係者	216 名
内 訳	
出演者	117 名
実行委員	32 名
運営スタッフ	28 名
運営ボランティア等	27 名
その他	12 名

参加者延べ数 1,206 名

一般参加者	884 名
関係者	322 名
内 訳	
出演者	150 名
実行委員・運営スタッフ	172 名

※実行委員は、実行委員会の委員とサポーターの両方を含む

＜スケジュールと会場＞

日	時間	会場	プログラム
2月12日	19:00～21:00	12階D会議室	1『社会福祉法人』は変わるか！？
		10階A会議室	2 沿線でつながろう！～地図で見るとなり街のボランティア～
		10階B会議室	3 企業人ボランティア交流会 ～会社の内外でネットワークしよう！～
		フィールドワーク	28 ごみ拾いから見る社会課題 ～夜の新宿・歌舞伎町へ～（集合：12階A会議室）
2月13日	10:00～10:30	12階B・C会議室	4 オープニング ～あしたのピースって？～
	10:40～13:10	12階A会議室	5『ゼノ・かぎりなき愛に』映画から考える平和の大切さ
		12階C会議室	6 現代の貧困 ～まずは知ることから始めよう～
		12階D会議室	7 罪を犯した人”の背景をひもとく！～その背景から、わたしたちの地域や暮らしを考えてみよう～
		10階A会議室	8 健聴者が気付かないコミュニケーションの壁 ～聴覚障がい者の社会環境を考える～
		10階B会議室	9 学生に「また来たい」と言われたい ～学生×地域×大学で考える学生目線のボランティア～
	14:30～17:00	12階A会議室	10「東日本大震災から5年」そしてこれから
		12階B会議室	11 パレスチナ問題を若者たちと語り合しましょう
		12階C会議室	12 物質的豊かさと心の貧困 ～ツーリズムから見る現代社会～
		12階D会議室	13「はじまりの物語」～セルフヘルプグループから「私たち」へのメッセージ～
		10階A会議室	14「do-ing（動員）」の力学を知ろう ～自主性ある地域活動をめざして～
		10階B会議室	15 ボランティアを通じて学生の生きる力（社会性・自己肯定感）を育てる
		フィールドワーク	29 地域と子どもと育ちあう場（集合：こまえボランティア・センター）
	17:40～19:10	10階A・B会議室	16 交流会
2月14日	10:00～13:00	12階A・B会議室	17 私の、私たちにとっての家族のかたち ～「家族」って何だろう？ 映画『うまれる すっと、いっしょ。』から～
	10:00～12:30	12階C会議室	18 非営利組織とお金 ～出し手と受け手の「意志」をひとつに～
		12階D会議室	19 2020年、東京パラリンピックに向けたムーブメント
		10階A会議室	20 みんなで作ろう！「明日のピース」～障害のある方々とアート作品をつくってみよう！～
		10階B会議室	21 外国にルーツを持つ子どもたちのキャリアを考える
	10:00～15:00	フィールドワーク	30「靖国神社」を歩こう（集合：1階区境ホール）
	13:30～16:00	12階A会議室	22 “家族のかたち” “地域のかたち” の今
	13:30～15:30	12階B会議室	23 ソーシャル界の“スティーブ・ジョブズ”ここにあり ～ITテクノロジーによる社会課題解決～
	13:30～16:00	12階C会議室	24 多様な非営利組織で働く多様な人びと ～NPOの価値を問う～
		12階D会議室	25 “きょうだい” Café ～語り合おう、障がい者のきょうだいのこと～
		10階A・B会議室	26 中学生・高校生、施設・団体と地域をつなぐ
	16:10～17:00	12階A～D会議室	27 クロージング ～みんなでつくる あしたのピース～
2月13日・14日		10階フロア	31「想いをかたちに」出会いの広場 ～民間助成金相談～ （13日：14:30～16:30 / 14日：13:30～15:30）
2月13日		1階区境ホール	32 ふれあい満点市場 ～NPO・NGOの作品展示販売～（10:40～16:00）
2月13日・14日		10階フロア	33 Open Café（13日（土）10:40～14日（日）16:00）
2月12日～14日		10階・12階	作品展示（12日（金）19:00～14日（日）17:00）

1 『社会福祉法人』は変わるか！？

○開催目的

今 社会福祉法人改革が謳われています。とりわけ「地域における公益的な取組の義務化」が定められ、新たな役割が問われようとしています。本来、社会福祉法人は、まったく制度がない時代から、市民活動の原点とも言える地域住民や多くの関係者がボランティアに連帯して制度化してきた法人です。この制度を改革するということは、現行の事業に何らかの活動を付け足せばよいというものではありません。

かつてそうしてきたように地域や多くの市民・ボランティアとの協働が必要であり、国や行政もその役割を新たに問われます。さまざまな制度の規制や厳しい経営状況のもと、社会福祉法人は変わるのでしょうか？

この分科会では、市民の目から捉えた地域における社会福祉法人の役割、ボランティア・市民活動と社会福祉法人の接点、そしてこれからのあり方について考えます。

○開催日時

2月12日（金）19：00～21：00

○参加者数・出演者・団体

参加者数：36名（参加者26名、出演者4名、スタッフ6名）

パネルディスカッション

パネリスト 西岡 修さん（社会福祉法人白十字会 白十字ホーム施設長）

矢沢 正春さん（社会福祉法人新宿障害者福祉協会 新宿区立あゆみの家
施設長）

高瀬 由直さん（社会福祉法人青梅市社会福祉協議会 事務局次長）

コーディネーター

安藤 雄太さん（東京ボランティア・市民活動センター アドバイザー）

○プログラム内容・成果と課題

1 各法人よりテーマに関する考え方やこれまでの取り組みの紹介

- ・各法人の概要、現在の地域における取組等を紹介していただいた。

2 登壇者パネルディスカッション

- ・各法人や社会福祉協議会ともに、成り立ち当初から地域とつながった活動を行ってきた。この改革でさらに何がもめられているのかを明確にする必要がある。
- ・社会福祉法人は現在でも、経営や人材確保等さまざまな課題を持ちながら運営をしているが、それでも地域、住民と協働した活動を行っていくのは当然。
- ・今後の方向性についてディスカッションを行った。

3 質 疑

○参加者の声

- 三人の方、それぞれの見解を聞くことができ、とても参考になった。主体的な取り組みをされていると感じました。業務だけでなく、区民、市民の声に耳を傾けてくれるか、共感を持って応えてくれるか差があるように感じている。時間が足りなかったように感じた。
- 地域の課題解決にも役目を担う、という本質は変わらないと思って聞いていました。さまざまなお立場の方のお話を伺い、取り組みにあたっての考え方について、視野を拡げてもらったと思います。
- 社会福祉法人について少しですが分かりました。また３人のパネラーの方の話に引き込まれ大変興味が湧き、できればそこで働きたいと思いました。
- 三者三様の考え方は、抽象的な部分もあったが、それぞれ大変参考になりました。スタッフが夢の見える法人を作っていってほしいです。

○担当者・記録

《担当》	柴田 健次（東京都社会福祉協議会）
	上岡 夏海（社会福祉法人白十字会 白十字ホーム）
	新部 聖子（スーパの会）
	宮崎 雅也（日野市ボランティア・センター）
	熊谷 紀良（東京ボランティア・市民活動センター）
《記録》	柴田 健次（東京都社会福祉協議会）



2 沿線でつながろう！

～地図で見るとなり街のボランティア～

○開催目的

「最寄り駅は隣の区だけど、どちらのボランティアセンターに相談したらいいの……？」

「通学・通勤途中の方がボランティアしやすいなあ……」

人口が密集している都市部では、人びとの生活圏と行政境とが一致しないボランティアの課題があります。この分科会では生活圏と行政境をまたぐ鉄道に注目し、地図を見ながら沿線におけるボランティアのマッチングのしくみを考えます。

○開催日時

2月12日（金）19：00～21：00

○参加者数・出演者・団体

参加者数：25名（参加者14名、出演者7名、スタッフ4名）

出演者：市川 徹さん（株式会社世田谷社）

阿部 恵美子さん（調布市市民プラザあくろす 市民活動支援センター）

高橋 義博さん（調布市市民プラザあくろす 市民活動支援センター）

前田 泉美さん（しぶやボランティアセンター）

柳澤 更沙さん（明治大学和泉ボランティアセンター）

戸田 絵津子さん（社会福祉法人世田谷ボランティア協会）

小原 恵美さん（社会福祉法人正吉福祉会）

○プログラム内容・成果と課題

1 参加者自己紹介

- ・各参加者の自己紹介、それぞれの活動地域で沿線グループ分け

2 沿線グループごとの課題出し

1）小田急線チーム

- ＊自宅と職場、どちらのエリアでボランティアを探すだろうか？

→つながっていく人はエリア関係なくつながっていくのでは

→地元を振り返ったとき、何ができるだろう？…知識・経験を生かしたい！

→この人たちを引き込めるような仕掛け、マッチングが必要

2）中央線・西武線チーム

- ＊「●●区ボラセン（＝ボランティアセンター）」となっても、区外いろいろなところから相談が来る

→エリアにこだわらずいろいろな情報を集めておく必要がある

→ボランティア活動を探すときもエリアを越えて探してはどうか

3) 京王線チーム

- *沿線に住んでいる人は何がやりたいのだろうか？
 - みんなに情報を届けるにはどうすればいいか？
 - IT など情報収集ツールの活用…海外にはボランティア情報の地域一括管理ツールがある
 - 日本には情報のプラットフォームはいくつかあるが一括ではない

3 沿線グループごとの課題に対するアイデア出し

1) 小田急線チーム

- *モヤモヤした人への窓口…「こんなことができる！」を見いだせる情報提供を
 - 受け入れ側の課題でも…せっかくながつながった人をつなぎとめる方法とは
 - 気持ちを汲み取ってリピーターを増やす…うまくマッチできていないことも
 - 逆マッチングもありでは（「こんなことができる」人を受け入れ先が連れてくる）
- *情報をスーパーなどにも貼り出したらどうか
 - オリンピックの情報システムに相乗りする
 - たとえば、ある駅で降りたらその地域のボランティア情報が見られるとか

2) 中央線・西武線チーム

- *区境でも近いところのセンターなどを案内している
 - 区境まつり・区境綱引きなどのイベントでお互いの交流を促してはどうか
 - 「不動産情報」のようにボランティア情報を探せるとよい
- *各駅にある情報ラックを活用させてほしい
 - CSR 活動でどうか、ポスターも無料で貼らせてほしい

3) 京王線チーム

- *SNS もいろいろありすぎて、何で発信したらよいかわからない
 - LINE スタンプを活用（沿線ゆるキャラなどをセットにして）
 - スタンプを入手した人には情報もお届けする（ボランティア・地域情報など）

4 次回に向けてのアイデア

- *情報をいろいろなところに発信する
 - 駅から始めてはどうか…駅の人と仲良くなる
 - 区のコミュニティバスに情報を掲載してはどうか
 - スーパー・郵便局・銀行に情報を貼り出してみてもどうか
 - 病院などの待ち時間を利用してはどうか
- *具体的なアイデアを実現していくことが必要
 - 企業、ボラセンスタッフなどいろいろな人が集まる今日のような場がグッド
 - いろいろな市区町村が一緒に情報を一括管理できるとよい
 - 地元自慢、ボラセン自慢をしながら、いろいろな人とつながっていければ

○参加者の声

- ・「沿線」をキーワードに自己紹介ができて、面白かった。ボラセンの広報の必要性、ボランティアコーディネーターさんの力量も必要なんだなあ…と思いました。楽しかったです。
- ・ボラセン、活動者、受け入れ団体とそれぞれの視点、立場があるので落としどころが難しい。活動者の声を反映するのであれば継続して行い、結果や出口を明確に定めた方が良いと考えます（成果物を作る、発表する、計画するなど）。
- ・「沿線」で、というよりは「行政の境」、というところでの悩みはあったので、周りの人と仲良くして広報を積極的にしようと思いました。

○担当者・記録

- 《担当》 市川 徹（沿線ボラセン交流会）
阿部 恵美子（調布市市民プラザあくろす 市民活動支援センター）
高橋 義博（調布市市民プラザあくろす 市民活動支援センター）
柳澤 更沙（明治大学和泉ボランティアセンター）
- 《運営サポート》 土屋 弦（明治大学 法学部）
志田 五十鈴（こまえボランティア・センター）
- 《記録》 市川 徹（沿線ボラセン交流会）
芦澤 弘子（聖学院大学ボランティア活動支援センター）



3 企業人ボランティア交流会

～会社の内外でネットワークしよう！～

○開催目的

企業で働きながらボランティアをしている人が増えていますが、仕事とは別の形で社会とつながり、元気になって、自分自身の成長や仕事を生かしてゆく……そんな生き方をしている人・目指している人が集まり、会社の中で、また、会社の外で活動をどう展開し、拡充していくかについて情報交換を行います。

○開催日時

2月12日（金）19：00～21：00

○参加者数・出演者・団体

参加者数：36名（参加者29名、出演者4名、スタッフ3名）

出演者・団体：

パネラー 山崎 直子さん（UBS 銀行 ディレクター）
 上杉 貴雅さん（オレンジフラッグ 代表）
 中川 径治さん（NEC ネットエスアイ株式会社）
ファシリテーター 河村 暁子さん（東京ボランティア・市民活動センター）

○プログラム内容・成果と課題

1 趣旨説明

- ・実行委員から開催趣旨説明を行いました。

2 登壇者パネルトーク

- ・ボランティア活動開始のきっかけは？
- ・活動の形態は？

についてパネルトークを行いました。

3 参加者全員のグループトーク

- ・グループを下記の3つのテーマごとに分けて討議を行いました。
 - 1 G) 企業の中で、ボランティア活動を活性化させるには
 - 2 G) 企業の外で、ボランティア活動を活性化させるには
 - 3 G) 企業のCSR部門や、中間支援組織を上手に使うって、ボランティア活動を活性化させるには
- ・各グループには、パネラーが担当として入りました。

4 グループ発表

- ・1グループは、パネラーの山崎さんに、UBS銀行の具体的な活動内容をお聞きしたい方が多く集まり、質問が絶えることがありませんでした。
- ・2グループは、企業でさまざまなボランティア活動を行っている方が集まり、各々の体験を活発



に発表していました。

- ・3グループは、これから企業内でボランティアを増やしていきたい方や、社会福祉協議会の方も混じり、各自の体験も織り交ぜ、さまざまな角度からボランティア活動の活性化について話が弾みました。

○参加者の声

- ・ボランティアのコツとして「楽しい、新しい、おいしい」というキーワードを教えていただいたが、とにかくボランティアを楽しんでいることに新鮮さを感じました（新人研修では学びを強調しすぎていたようです）
- ・交流会も含めて新しい出会いがあり、いろんな意見を聞け、今後の活動のヒントとなりました。
- ・とにかく、楽しくまた参加したいと思いました。
- ・大いに、エネルギーを貰いました。できればUBS銀行の話をもっと聞きたかったです。
- ・全体時間が短く、特に交流時間はもっとほしかったと思います。

○担当者・記録

《担当》	中川 径治（NECネットエスアイ株式会社） 鹿住 貴之（認定NPO法人JUON〔樹恩〕NETWORK） 河村 暁子（東京ボランティア・市民活動センター）
《運営サポート》	筋 清（運営ボランティア） 小杉 弘美（運営ボランティア） 森田 美穂（東京ボランティア・市民活動センター）
《記録》	中川 径治（NECネットエスアイ株式会社） 小川 美佐子（NECネットエスアイ株式会社）



4 オープニング ～あしたのピースって？～

○開催目的

ボランティアフォーラム TOKYO2016 のオープニングとして、フォーラム実行委員会メンバーが、それぞれのプログラムのねらいや想いについてお話しします。

今年の全体テーマは「私たちがつくる あしたのピース」。「あしたのピース」について、このボランティアフォーラムでどんなことを考え、学び、話し合うのかをいっしょに考えます。

○開催日時

2月13日（土）10：00 ～ 10：30

○参加者数・出演者・団体

参加者数：57名（参加者49名、出演者3名、スタッフ5名）

出演者・団体：鹿住 貴之さん（認定NPO法人JUON〔樹恩〕NETWORK）

志田 五十鈴さん（こまえボランティア・センター）

上田 英司さん（NPO法人NICE）

○プログラム内容・成果と課題

オープニングでは、ボランティアフォーラムでどのようなことを目指すのか、何を行うかを、実行委員の3名が鼎談する形で進めました。

●紹介した内容

・ボランティアフォーラムのテーマ「私たちがつくる あしたのピース」の意図

戦後70年という節目の年に、安全保障関連法案が成立し、私たちの暮らしのなかで、平和ということのを改めて考える必要が出てきました。世界情勢を見渡しても、混とんとした状況があり、誰もが自分らしく、日々平和に暮らすことのできる豊かな社会を築いていくために、一人ひとりが大切な役割、「ピース」を担っていくという想いを込めて、このテーマに決定しました。各分科会で、誰もが自分らしく、平和に暮らすということは、どんな社会なのかを考え、自分がそのテーマに対して、どのようにコミットしていくかを考えてほしいと思っています。



・ボランティアフォーラムのこれまでの経緯や歴史の共有

ボランティアフォーラムが始まったのが、2004 年。もともと、啓発的なものとして「ボランティアまつり」が 10 年、その後、福祉以外にも広がった、見本市的な場所として「ぼらんていあ・めっせ」が 10 年それぞれ行われました。そして、2004 年からより研究集会的な意味合いを持つものとして「ボランティアフォーラム」が始まりました。ボランティアフォーラムの初期のころは、「つなぐ つながる つなぎあう」というテーマを 3 年間継続していましたが、当時の社会背景から、地域社会において人と人のつながりの希薄化を改めて問い直すために実施しました。その後も、毎年テーマを変えて行っています。「危機（クライシス）に立ち向かう市民活動」というテーマで、大きく課題を投げかけるような年もありました。

・ボランティアフォーラムの実行委員会について

ボランティアフォーラムの実行委員会は、分野・地域・セクターを横断したボランティア・市民活動にかかわるメンバーで組織されています。実践の中で直面している課題や想いをもとに、時間をかけてプログラムをつくりあげてきました。実際の実行委員会は、いい意味で“ごちゃ混ぜ”といった様子で、多様な議論のなかで進めてこられたことが強みです。

・今年のボランティアフォーラムの見どころの紹介

今年のボランティアフォーラムでは、フィールドワークを取り入れており、前日の新宿歌舞伎町でのごみ拾いや靖国神社を訪れるプログラム、狛江市で行われる常設のプレーパーク見学の 3 つのプログラムが用意されています。また、公募企画で、市民の方からの提案で作られた分科会があったり、実行委員会が情熱をかけて作り上げた分科会ばかりですので、楽しみにご参加いただきたいと思います。

○担当者・記録

《担当》	上田 英司（NPO 法人 NICE）
《運営サポート》	鹿住 貴之（認定 NPO 法人 JUON〔樹恩〕NETWORK）
	志田 五十鈴（こまえボランティア・センター）
	小川 美佐子（NEC ネットエスアイ株式会社）
	筋 清（運営ボランティア）
	小杉 弘美（運営ボランティア）
《記録》	上田 英司（NPO 法人 NICE）
	川崎 淳哉（運営ボランティア）



5 『ゼノ・かぎりなき愛に』

映画から考える平和の大切さ

○開催目的

この分科会は、昭和5年（1930年）に来日し、第二次世界大戦勃発後も日本に滞在し続け長崎で被爆、戦後以降戦災孤児や災害被災者等の救援活動を行ったポーランド人でキリスト教カトリックの修道士ゼノ・ゼブロフスキー（昭和57年、東京で死去）の生涯を描いたアニメーション映画を鑑賞します。ゲストとしてご参加いただく、製作総指揮をされた千葉茂樹さん（映画監督）の話なども聞きながら、映画を通じて平和の大切さを考えようという企画です。

○開催日時

2月13日（土）10:40～13:10

○参加者数・出演者・団体

参加者数：15名（参加者10名、
出演者1名、スタッフ4名）
出演者・団体：千葉 茂樹さん（映画監督）



○プログラム内容・成果と課題

1) 長編アニメーション映画「ゼノ・かぎりなき愛に」作品の紹介

この映画は、1998年に「ゼノさんの映画をつくる会」によって製作され同年11月には松竹系映画館で全国公開が行われ、特定非営利活動推進法の施行された時期でもあってボランティア関係者などに反響を呼びました。

本映画の脚本及び監督は故手塚治虫さんの弟子でさまざまなアニメーション製作にかかわってこられた宇井孝司さん、製作総指揮はマザーテレサとその世界などの作品で知られる近代映画協会の映画監督千葉茂樹さん、スタッフは映画の趣旨に賛同した手塚プロダクションやスタジオジブリ作品などを手掛けてきた多くの方々が参加しています。

映画製作費は約1億8000万円。この費用は新聞各紙などで紹介されたこともあって、約1200人からの製作協力会費（収益金から返還）が約6000万円、ゼノさんを知る2000人以上の方々からの寄付金が1億2000万円集まり、映画を完成することができました。

物語は昭和20年8月9日、長崎の原爆投下のシーンから始まります。郊外にある修道院で被爆したゼノさんは、直後から長崎市内で被爆した人々の救助活動などを行います。終戦後、まちにあふれる戦災孤児たちを修道院に集め、救済のための施設運営などを行いますが、東京から疎開していた子ども源太郎の放火によって施設を焼失します。

放火した源太郎は施設を逃げ出し、東京へ戻って上野で浮浪児となっていました。東京へ出かけたゼノさんと偶然出会い、家族との再会や東京での救済活動などが描かれ、最後は年老いたゼノさんを、更生して医者となった源太郎が世話をするというドラマになっています。（ビスタサイズ 74分）

2) この映画はどのような思いがあって製作されたのか、千葉茂樹さんに聞きました。

映画を製作した 1990 年代の後半は、バブル経済が崩壊して 95 年には阪神淡路大震災が起き、日本全体が政府に頼るのではなく国民一人ひとりや地方や地域が自立していかなければならないという機運がありました。NPO 法ができるなどして、市民同士の助け合いによるまちづくりの実践が求められ、ボランティア活動の推進が訴えられていたところでボランティアの意味を問い直す必要性を感じていました。

ゼノさんはマザーテレサと同様の活動を日本で行っており、昭和 40 年代ぐらいまでは日本人の誰もがゼノさんのことを知っていたのですが、今ではすっかり忘れ去られています。ゼノさんのことを改めて日本の皆さんに紹介することと、ゼノさんの生涯を通じてボランティア活動の原点を考えるきっかけになればという思いで製作しました。

○なぜアニメーション映画で製作しようと思ったのですか？

監督した宇井孝司さんが手塚治虫さんの弟子で、企画の最初から実写よりもアニメーションの方がよりリアリティあるストーリーを展開できるということと、この映画を若い人たちにたくさん見てほしいということでアニメーションになりました。ゼノさんは、生前はずいぶんマスコミなどにも取り上げられ、探せばニュースフィルムなども結構あるのでドキュメンタリーでの製作も考えたのですが、劇場公開の映画にするにはアニメーションの方が実現の可能性が高いとも考えました。

○映画製作で苦労した点はどこですか？

やはり製作費の問題は大きかったですね。なにしろまったく資金のないところからのスタートでしたので、億を超える資金をどうやって準備するのか最初は相当の困難を予想していました。

企画を立ち上げ「ゼノさんの映画をつくる会」ができたことを知った朝日新聞が取り上げてくれて思いのほか反響があり、NHK も特集を組んでくれたりしたことで一般の方々からの資金協力の申し込みが増えたのです。ただ、製作費がすべて集まるには時間がかかると予想して財源確保と並行して製作を進めましたが、どうしても予定の予算が集まらず、本来は 90 分の作品になる予定が脚本を書きなおして 74 分に短縮せざるを得ませんでした。

3) 平和の実現に向けて

○この映画が訴える平和の対するメッセージとはどんな事ですか？

放火して逃げた源太郎を攻める大人たちに、ゼノさんが、悪いのは子どもではなく戦争を止めることができなかった大人の責任であって、子どもたちは守るべきなんだと話すシーンがあります。映画のタイトルの通り「がぎりない愛」の実践ということなんですね。これはボランティアの原点だと思います。

映画の中で、戦争は愛する大切な人を失い、財産を失い、地域を崩壊させる恐ろしいもので、どんな事があっても二度と再び戦争を起こしてはいけないという強いメッセージを発信しています。戦災や自然災害で苦しんでいる人々を助け続けたゼノさんの存在は、日本が高度経済成長を遂げる中で忘れ去られていきます。今、改めてゼノさんを思い出すことによって、平和を守ることがいかに大切で、私たち一人ひとりが平和のためにできる事を惜しみなく行動し続けなければならないということに気付いていただければと思っています。



4) 分科会のまとめ

本分科会の参加者からは「ゼノさんのような人が実在したということは信じられない」「戦争がいかに恐ろしいものかということのを改めて考えさせられた」「平和の大切さを語り続けなければ行けないと思った」などの意見をいただきました。

世界では今だ戦争が続いており、テロの危険など日本においても人ごととは思えない状況です。日本の安全保障関連法があらたに法制化され、一歩間違えれば日本が再度戦争に巻き込まれる可能性が取り上げられています。日本の歴史として戦争を経験していることを忘れることなく、安全保障への取り組みが変わることがあっても一人の市民として平和の大切さを見失ってはいけないという意識を共有することができた分科会となりました。

○参加者の声

- ・普段だったらなかなか見ない映画アニメを見れて良かった。また、新たな面から平和を考えることができました。
- ・自発的なボランティアの心が人の気持ちを動かす大きな力になるということが心に残りました。
- ・ボランティアの視点から平和について考えるという、関連はありそうでもいざ結びつけるとなると少し考え込んでしまうようなテーマはとても斬新でした。
- ・映画の内容はとても良く、心を打たれる内容でした。映画をおつくりになったお2人のお話しも興味深く、熱意が本当に伝わってきました。

○担当者・記録

《担当》	枝見 太朗（一般財団法人富士福祉事業団）
	阿部 恵美子（調布市市民プラザあくろす 市民活動支援センター）
	鈴木 正昭（りすこ〔おおた復興支援活動連絡協議会〕）
《運営サポート》	市川 徹（沿線ボラセン交流会）
《記録》	枝見 太朗（一般財団法人富士福祉事業団）

6『現代の貧困～まずは知ることから始めよう～』

○開催目的

「貧困ビジネス」「家庭崩壊」「子どもの貧困」……そんな言葉を日本でもよく耳にする現代。でも、実はあまり実態がわかっていないという人も多いのではないのでしょうか。金曜日に開催した新宿・歌舞伎町でのごみ拾いとの連動プログラムとして、フィールドワークの報告を行った後、歌舞伎町からイメージされる「貧困ビジネス（路上生活者）」「風俗」など、現代の貧困について参加者と一緒に考えていければ、と思い企画しました。まずはイメージだけではなく、現実を「知ること」が社会を変える一歩だと思っています。

○開催日時

2月13日（土）10：40～13：10

○参加者数・出演者・団体

参加者数：35名（参加者29名、出演者2名、スタッフ4名）

出演者・団体：角間 淳一郎さん（一般社団法人 GrowAsPeople）

後藤 浩二さん（スープの会）

○プログラム内容・成果と課題

1 アイスブレイク

- 「ホームレス（路上生活者）」「風俗」からイメージすることを共有
- ・「ホームレス」のイメージ：寒そう、不安、行政が公園から追い出す、生活保障など
- ・「風俗」のイメージ：欲望、JK（女子高生）ビジネス、社会から疎外など
- 双方に共通することとして、孤独感、軽度の知的障がいなど

2 前日の歌舞伎町でのごみ拾いの報告

- 写真を見ながらごみ拾いの様子を報告、ごみ拾い参加者からの感想

3 登壇者からのお話しと質疑応答

- 角間さんより、「風俗」で働く女性の支援について
- ・現代の「風俗」はネットの世界にあり、イメージだけで考えてはいけない。ラベリングしないで欲しい、というお話がありました。
- ・「風俗」を辞めた後の、セカンドキャリアを支援しており、25歳から一気に相談が増えるそうです。
- ・実際の支援として、まず収入の把握を促す。次に、自分の空いている時間を有効に活用し、NPOなどでインターンをしてもらう。その際、自発性を待つことが重要。
- 後藤さんより、路上生活者支援から見る「現代の貧困とは」について
- ・歴史的に「貧困」の概念がどう変わってきたか、という話の中で、現代日本の「社会的包摂（ソーシャルインクルージョン）」の課題



として「制度の狭間」が挙げられました。

- ・「自己責任論」が言われる中、当事者が「支援を望まない人」として見られることがあるが、もともと自尊心の欠如も見られることから、しっかり関わって対話し、関係性を作っていくことが必要というお話がありました。



○共通すること

- ・どちらも周りに相談できる人がいない。もしかしたら「居場所」「労働」の問題に近いのではないだろうか。
- ・見えないものをどう見るか、当事者との関係性を作っていく必要がある。

◎ ふり返って

印象的だったのは、そこに至った「入口」を見る人が多いが、そこに至るのは、船に小さな穴が開いているようなもので防げない。だからこそ、「出口」での支援が重要だという言葉でした。その「出口」のハードルがいかに高いか。多様な貧困状態の人がいるが、なかなか当事者だけでは抜け出せない。だからこそ、多様な人々が関わっていく必要があります。しかし、当事者がどこで何をしているのか事実を理解しないと支援はできません。そのためにも、イメージや先入観を持たずにしっかり事実を見る努力を続けていかなければならない、と強く思いました。

最後に、参加者の方に「ホームレス」「風俗」のイメージがどう変わったかを話し合ってもらいました。多くの方のイメージが変わっていました。そこで感じたものから、次のステップが始まるのだと思います。

○参加者の声

- ・身近な問題だと思いました。当事者がどんなに遠くにいても・・・。
- ・孤立について知ることができた。市民社会全体の問題だという認識を得た。
- ・今回、さまざまな事を学べたが、福祉の課題の難しさを感じた。だからこそ、改めて福祉の面白さを感じた。
- ・風俗に対して、貧困や複雑な家庭環境により性的搾取を受けているというイメージがあったが、入口は誰にでもあり得るものであることが分かった。
- ・現場で活動されているお二人のお話は大変示唆に富んだ内容で、貧困や風俗についての表面的な見方がいかに一面的だったか分かった。

○担当者・記録

《担当》	神元 幸津江（いたばし総合ボランティアセンター）
	内田 智子（認定 NPO 法人 ESA アジア教育支援の会）
	杉村 郁雄（NPO 法人日本ファシリテーション協会）
《運営サポート》	奥貫 泰行（運営ボランティア）
《記録》	神元 幸津江（いたばし総合ボランティアセンター）

7 “罪を犯した人”の背景をひもとく！

～その背景から、わたしたちの地域や暮らしを考えてみよう～

○開催目的

その人の背景や抱えていたものを知り、理解することは、再犯をなくしお互いに助け合える地域づくりにつながるのではないのでしょうか。

この分科会では、「触法」・「累犯」を切り口としながら、制度について確認し、また罪を犯すに至った背景を知り、それぞれが自分の身近なこととしてとらえ、安心して暮らせる地域・つながりづくりについて考えます。

○開催日時

2月13日（土）10：40 ～ 13：10

○参加者数・出演者・団体

参加者数：31名（参加者24名、出演者3名、スタッフ4名）

出演者・団体：赤平 守 さん（特定非営利活動法人 日本障害者協会（JD）理事・

企画委員会副委員長、新宿区保護司）

安西 清 さん（日野・多摩・稲城地区保護司会 会長）

河村 斉 さん（株式会社リバイバル 代表取締役）

○プログラム内容・成果と課題

1 登壇者活動紹介

- 各団体の活動概要を紹介していただきました。

2 登壇者パネルトーク

- 地域生活定着支援センターを創設した背景と現状とこれから
- 保護司とはどういう役割があるのか
- 協力雇用主の役割
- 罪を犯した人の背景や事例について
- 罪を犯した人を地域で支えるには

3 参加者とのグループトーク

- 登壇者の話を聞いて感じたこと
- 罪を犯した人の背景を知り、私たちは何ができるか？

についてグループトークを行い参加者で共有しました。



4 課題

- 刑務所に入っている人たちの中には障害のある人も多くいて、社会に復帰した後もとても困難な状況にある。
- 犯罪自体は、年々減っていることをデータから知ることができるが、高齢者の犯罪は増えており、それに伴い刑務所も高齢化している。
- 知的障害者（IQ70未満）の人も刑務所には30%ほどいて、出所後も生活するのが困難で、再犯をくりかえし何度も刑務所に入ってしまうことが多くある。
- 障害や貧困などが必ずしも犯罪の連鎖につながるわけではなく、その状況に対する絶望感や孤独感、生きにくさが犯罪または再犯につながってしまう。
- 更生保護に関心を持ってもらえるような機会が少ないため、実状を知ってもらうことが必要である。
- 虐待や貧困、親が障害を持っていることなどが背景にあり、少年院や刑務所がシェルターの役割を持っているという事情もある。
- 金銭面の貧困でなく、社会との関わりや、家庭環境の貧困状況が課題である。



5 成果（話されたこと）

- 罪を犯した人自身も孤立しているが、支援する側も孤立してしまう場合もあり、いろんな組織や人とのネットワークが必要。
- 生きにくさ（社会の波にのまれた）を抱えた人がいることを正しく知ってもらう必要がある。
- なぜ罪を犯すような状況になってしまったかに気づき、気づいた人が積極的に関わらないと救われない人が出てきてしまう。
- やり場がなくなり罪を犯してしまった若者が、社会復帰する際に受け入れられる立場になりたい。
- 助けてほしいと手を差し伸べている人に対して、その手を握り返せることが必要。
- 今の生活を手放したくないと思える安心した環境を、一緒に考え作ることが大切。

○参加者の声

- 今回の分科会を通し、人と人のつながり、社会全体で見守っていくことがとても重要であると再度考えさせられました。いろんな人に発信していくことも大切。
- このようなテーマの講演会やフォーラムが大変少ない中、本日は多くのことを学ばせて頂き、「関心」というスタート地点を頂きました。
- 実際の当事者のお話を聞き、手を差し伸べる事が（どのような反応でも）更生のきっかけの1つになれると分かりました。
- 去年、精神的に大変追い詰められたこともあり、罪を犯す瀬戸際までいった事もありました。抑止力となりえるということと、罪ということの理解を深められました。
- きちんと正しく、理解することの大切さ、一緒に見て、一緒に気付いていく、という言葉が響き

ました。

○担当者・記録

《担当》	宮崎 雅也（社会福祉法人 日野市社会福祉協議会） 新部 聖子（スープの会）
《運営サポート》	川上 侑希子（東京大学大学院 教育学研究科） 柴田 健次（社会福祉法人 東京都社会福祉協議会）
《記録》	宮崎 雅也（社会福祉法人 日野市社会福祉協議会）

8 健聴者が気付かないコミュニケーションの壁

～聴覚障がい者の社会環境を考える～

○開催目的

聴覚障がい者の離職率の高さの背景には、健聴者中心に構築されている社会のシステムに順応できない『壁』の存在が見受けられ、その壁はコミュニケーション由来の課題だと思われます。よって、聴覚障がい者のよりよい社会環境を構築するために、どのような取り組みが必要か、聴覚障がい者と健聴者で話し合うことで新しい考えを生み出すことを目的としました。

○開催日時

2月13日（土）10：40～13：10

○参加者数・出演者・団体

参加者数：33名（参加者28名、出演者2名、スタッフ3名）

出演者：伊佐治 正幸さん（株式会社リコー / リコー手話サークル講師）

伊藤 芳浩さん（NPO 法人インフォメーションギャップバスター 理事長）

○プログラム内容・成果と課題

◆プログラム

1 登壇者の紹介

- ・活動紹介
- ・この会に期待することなど

2 グループワーク①

- ・参加者の自己紹介
- ・この会に何を期待してきたか
- ・参加者が課題に感じていることを共有

3 グループワーク②

- ・聴覚障がい者と健聴者でどのような環境になればよいかを話し合う
- ・グループごとに発表

◆成果と課題

継続の必要性が得られたことが、今回の分科会において最大の課題でもあり成果でもあると思います。アンケート結果の中には「消化不良」「時間が無い」などの意見が見受けられましたが、2時間半の中でほとんどワークに費やした時間が、参加者にとっては短く感じたり、十分に話せていないという結果になりました。この結果について抱えている課題の大きさや深さを感じるとともに、議論が活発に行われた裏返しだと思います。このような場の設定が必要であるということが確認できたので、



成果だと感じています。一方で、現段階では健聴者と一緒に、聴覚障がい者における職場のより良い環境構築について話し合うには、課題の共有がまだ不十分だと感じました。まずは、この企画を通して知り合えた人達とともに取り組みの継続をし、今一度、課題の抽出に注力し、健聴者との共有を図りたいと思います。

○参加者の声

- 職場で起こりうる問題、課題を知ることができた。聴者とろう者のバランスが取れているととても良いと感じました。
- 気付くことの多いワークができました。ですがもっと時間を頂き、聴こえない方と聴こえる人双方の理解をもっと進めて、更なる気付きと、良い解決策を見つける事ができると思います。
- 限られた時間の中で、時間に追われながら進めていってしまい、内部の消化に不十分な面が残ったように思う。
- 健聴者が感じている思いと、ろう者が健聴者はこう感じているだろうとする思いは違う事、あまり気にしなくても良いのだと気付き、少しラクになりました。とてもいいディスカッションができ、良かったです。

○担当者・記録

《担当》	高橋 義博（調布市市民プラザあくろす 市民活動支援センター）
	上岡 夏海（社会福祉法人白十字会 白十字ホーム）
	岡部 沙耶（東京ボランティア・市民活動センター）
《記録》	高橋 義博（調布市市民プラザあくろす 市民活動支援センター）

9 学生に「また来たい」と言われたい

～学生×地域×大学で考える学生目線のボランティア～

○開催目的

学生ボランティアは「どうしてうちの団体には来てくれないの?」「単発で終わりがちなの?」

学生の参加を広げ、継続につなげるために、受け入れ団体やボランティアコーディネーターは、どのような関わり方やプログラムの工夫をすればよいのでしょうか。

この分科会では、地域活動団体「ぎんなん会」の活動をモデルケースに、この活動に携わる学生の想いと受け入れ団体との関わりを通じて、学生目線になって考えます。

※ めんなん会とは、杉並区立済美養護学校の生徒（以下、「会員」）の卒業後の進路を案じた保護者が集まり、生徒の自立と就労を目指して、試行錯誤で始まった活動です。30年間の歴史があり、現在では会員のニーズに合った、余暇を過ごす場としても活動しています。明治大学のボランティアサークルしいの実は継続して、この活動に参加しています。

○開催日時

2月13日（土）10：40～13：10

○参加者数・出演者・団体

参加者数：39名（参加者31名、出演者4名、スタッフ4名）

出演者・団体：

【ボランティアに取り組む学生】

土屋 弦さん（心身障害者福祉会しいの実／明治大学2年）

渡辺 絢香さん（心身障害者福祉会しいの実／明治大学2年）

【地域活動団体】坂野 和枝さん（しいの実受け入れ団体／めんなん会代表）

【コーディネーター】

西川 正さん（NPO法人ハンズオン！埼玉 常務理事／埼玉大学非常勤講師）

○プログラム内容・成果と課題

【プログラム内容】

1 導入のワーク

- 参加者に、「学生ボランティアの位置付け」、「どうして学生ボランティアに来てもらっているのか」、「学生を受け入れるにあたって気をつけていること」について考えてもらい、「分科会で聞きたいことや悩み」を提起してもらいました。

2 坂野和枝さんから地域活動団体「めんなん会」の活動概要や学生ボランティアと接するにあたり気をつけていること等について伺いました。（以下、一部紹介）

【活動の関係性と学生ボランティアの位置付け】活動が保護者、会員、ボランティア、顧問教員相互の関係性の中で一種の社会として成り立っており、学生ボランティアは保護者でも教員でもない社会人として位置付け、会員の環境を広げてくれる存在としての役割を期待している。

【ボランティアとのコミュニケーション】ボランティアとのコミュニケーションを大切にして、活動中はボランティアと会員の動きを見守り、失敗したことや悩んだことは持ち帰らずに話してもらう

ようにする。活動中の保護者とのコミュニケーションを通じて自らの人生像を描く人もいる。

【フィードバック】ボランティア研修会や合宿では懇親会を開催し、会員の支援の仕方を共有する。

【理由を話すこと】会員との関わりのなかで、4年間のなかで結果は出ないかもしれないが、関わりつつけることが大切であると伝える。

【学生の学び】例えば、活動を通じて大きな声で自分の意見をいうことが就職活動につながるなど、結果として学生の学びにつながっている。

3 ボランティアに取り組む学生の土屋弦さん、渡辺絢香さんから継続して活動に参加している理由や魅力について伺いました。（以下、一部紹介）

【ボランティアの居場所】ボランティアを「一個人」として観てくれる、見守ってくれる雰囲気や「目の前の学生を育てよう」という意識を感じる。

【フィードバック】活動参加後のボランティア研修会、懇親会や反省会でのフィードバックがあること。

【関係性と継続要因】活動に参加していくことで、ボランティア同士や、保護者、会員との関係性が生まれ、そのやりがいや楽しさがボランティア活動の継続につながっている。

4 質疑応答

- ・「ぎんなん会」の事例報告を受けて、学生の主体性や積極性を引き出すための工夫や情報提供の在り方等といった更に発展した議論ができました。

5 まとめのワーク

- ・分科会の感想の共有（「参加者の声」参照）



【成果と課題】

地域活動団体と、実際に活動に参加している学生の報告を通じて、学生ボランティアの位置付けやフィードバックの重要性など、学生の継続した活動につながる基礎について共有することができました。さらに、どうすれば学生の主体的な活動につなげていくことができるか等にも議論を広げていくことができました。

この分科会の成果を各団体に持ち帰り、学生の継続した活動へつなげていくことを期待しています。また、参加者には学生ボランティアの積極性を高める工夫について関心を持っている方も多く、次のス

テップとして、そのような議論の場を設けていきたいと思います。

○参加者の声

- ・参加している学生の生の声、受け入れ先との関係が良く分かり、とても良かったです。
- ・安心感→居場所→主体性、というまとめに、しっくりしました。
- ・フィードバックという共通の主題について学べた。その形として、関係性の中で生まれるボランティアの成長を見守る受け入れ側の視点を知れたのは、ボランティアとして関わるなかで非常に有意義でした。
- ・フィードバック、居場所づくりも意識した団体を目指していけるかな？と思うことができた分科会でした。
- ・自分たちの取り組みを改善すべき要素が明確になりました。また、いくつかの改善案を考える事ができました。
- ・学生が自ら成長を感じ取ることができ、それを受け入れ側も実感しています。大学としては、これをいかにコーディネートするかだと思います。整理して次につなげたいです。



○担当者・記録

- 《担当》 芦澤 弘子（聖学院大学ボランティア活動支援センター）
 遠藤 信裕（なぎさ和楽苑）
 辻 陽一郎（國學院大学ボランティアステーション）
 土屋 弦（心身障害者福祉会しいの実／明治大学2年）
 柳澤 更沙（明治大学和泉ボランティアセンター）
- 《記録》 芦澤 弘子（聖学院大学ボランティア活動支援センター）

10 「東日本大震災から5年」そしてこれから

○開催目的

東日本大震災から5年になろうとしています。被災した東北や避難してきた方々とつながる活動が行われる中で、市民の自主的な取り組みによって草の根ネットワーク的な災害ボランティアチームが誕生したり、ボランティア活動が続ける中で東北に移住した方や、避難者を受け入れる活動をされている方もいます。

「東北は復興した」とボランティア活動が縮小していく中で、今も熱心に活動が続けている団体の方方をゲストに、広範囲に渡る東日本大震災関係のボランティア活動を紹介して、新たな活動へとつなげて行きます。

○開催日時

2月13日（土）14：30～17：00

○参加者数・出演者・団体

参加者数：42名（参加者32名、出演者6名、スタッフ4名）

出演者・団体：

佐藤 良子さん（立川・東日本大震災避難者を支援する会 会長）

小野 紀之さん（大田区被災地支援ボランティア調整センター 事務局長）

仙 裕司さん（大田区 縁プロジェクト 会長）

井上 健さん（Cocoro Care for Children 副代表）

能登 春男さん（人の輪ネット 代表）

<一般参加からの報告>

湯前 知子さん（NPO 法人フォトボイス・プロジェクト 共同代表）

○プログラム内容・成果と課題

1 登壇者活動紹介

1) 福島からの避難者支援活動

佐藤良子さん 立川市の大山団地で行われている活動について。孤独死ゼロのコミュニティを大切にした取り組みによって、福島からの避難者のみなさんも安心して知らない土地で生活ができている。今までの活動で築いてきた実績を紹介。

能登春男さん ご本人も福島からの避難者としていろいろな体験をする中で、避難者の子どもたちやお年寄りに対するケアが必要と感じ、福島の人たちが交流する場をつくり、現在も広く活動をしている。福島の方々の不安を拭くことや将来のことを考えていくことが大きな課題となっている。

2) 大田区の復興支援の取り組み紹介

小野紀之さん 震災以降、大田区では区内の避難者のケアを始め定期的な交流を行っている。また、宮城県東松島市には災害ボランティア派遣を最近まで実施しており、その関係から「災害時相互応援協定」も結んでいる。この取り組みによって大田区で大災害が発生しても、現地ボランティア活動の経験者が大勢いることで速やかな対応が可能になる。

仙裕司さん 小野さんが紹介した大田区の災害ボランティアに参加して初めての復興支援活動を行った。ご遺体への対応は自衛隊が行っていたが、それ以外のさまざまな活動を通じて、多くの経験をした。何度も東松島市に行く中で現地の方々との交流が生まれ、皆さんに元気になってもらおうとギターを弾いたら大勢の人が集まって来て一緒に歌った。そこから東松島市の皆さんを招待するコラボ企画の「絆音楽祭」も誕生した。

3) 子どものケアを実施する活動

井上健さん 夫婦で精神科医をしており福島の子どもの診察をしながらレクリエーション活動なども行っている。飯館村などに行く時は、子どもたちの健康チェックなども行いながら、実際には保護者から話を聴くなどして、重要な大人へのケアも実施している。今までのデータを分析し何ができるのかを検討していきたい。

4) 一般参加

湯前知子さん 東日本大震災で被災した女性の方々が、災害の地やさまざまな場所を撮影し、その写真に言葉を重ねることで自分の思いを少しずつ語り出す取り組みを行っている。写真を見ながら参加者がそれぞれの詩を朗読。

2 登壇者パネルトーク

各団体の今後の取り組みや、参加者へのメッセージを一言ずつお願いした。



<課題>

東日本大震災の復興支援活動にはさまざまな団体や組織が多岐に渡り関わっていることを改めて伝える良い機会となったが、それぞれの活動紹介に長時間を費やしてしまい、当初描いていた、団体同士のコラボレーションが生じる仕組みにつながらなかったのは残念でした。

実行委員会の折に、《ボランティアセンターには登録されていないボランティア活動》を主にプログラムを考えてプレゼンテーションをした時に、《東北の皆さんの声》《子ども》《障がい者》《お年寄り》などマイノリティーな部分も含めた広範囲な皆さんの報告があると良いのでは？という周りからの意見のもと、ゲストを増やして対応したことは良かった点も多いものの、テーマの集約ができずに終わってしまった点は否めません。しかし、このような報告会は最近少なくなっているために参加者には新鮮に映ったり、今後の活動に対するヒントやアドバイスが内包されたプログラムであったと思っていただけたのは幸いでありました。

○参加者の声

- Volume たっぶり。少し考えさせられたのは、近年生活保護法が改正され、扶助費の削減が図られ、原発事故の被災地では調査等が国の責任で行われず、仮設住宅に暮らす被災地の支援は打ち切られてきていることです。行政の限界を把握して、その修正を求める必要があるのだらうと思いました。
- あらゆる視点で団体の方からの生の声を聞くことができ、大変勉強になりました。支援をする中でみえてくる新たな課題を模索していきながら、いろんな方が継続した支援を行っていることを改めて知ることができました。
- 会場いっぱいの方々が参加して下さったことがよかった。また、一部で風化が起こっているが、関心を持っている方が多く、心強かった。それぞれの活動がユニークで、本当に被災者のニーズをくみ取った現場の支援活動を具体的に知った事や、そういう方たちとネットワーキングができる機会を与えてもらったことがありがたかった。
- 日頃、震災についての話を聞くことはあっても、なかなか直接伺うことの少ない視点での話を聞くことができ、大変参考になりました。また支援以前に、自らの足元の不確かさと、備えの不足を実感しました。
- 震災が起きた後に、さまざまな活動で被災者の方達を支援していることにとても感銘を受けました。

○担当者・記録

《担当》	鈴木 正昭（りすこ〔おおた復興支援活動連絡協議会〕） 枝見 太朗（一般財団法人富士福祉事業団） 宮崎 雅也（社会福祉法人 日野市社会福祉協議会）
《運営サポート》	筋 清（運営ボランティア） 金岡 佐映（運営ボランティア）
《記録》	鈴木 正昭（りすこ〔おおた復興支援活動連絡協議会〕）

11 パレスチナ問題を若者たちと語り合いましょう

○開催目的

- 1 概要： 1948年のイスラエル建国以来、住む土地を奪われ、特に封鎖の厳しいガザ地区で難民生活を余儀なくされているパレスチナの方々の苦しみを知り、私達ができること、特にどうすれば、現地の情報を他の方々に伝えやすくなるのかについて語り合います。
(さまざまな理由により、故郷を奪われたという共通点をもつ沖縄、福島、在日の青年の方々にも対話に加わっていただきます)
- 2 目的：
 - 1) パレスチナ、沖縄、福島、在日に関わる方々の共通の課題は、各々の問題が、それらと関わりのない方々に伝わりにくいことにあります。また、関わりのない方々の無関心さにあります。そこで、本分科会では、互いに、自らが、どのような行動を取れば問題が伝えやすくなるかについて、立場の違う方々が集まり小グループを作り、討議を行います。
その行為を通して、参加者各自が今後の活動のヒントを掴んでいただきます。
 - 2) さらに、立場の違う方々が交流し、新たな人間関係を構築する機会とします。

○開催日時

2月13日(土) 14:30 ~ 17:00

○参加者数・出演者・団体

参加者数：32名(参加者24名、出演者4名、スタッフ4名)

出演者・団体：

田中 好子さん(認定NPO法人パレスチナ子どもキャンペーン 事務局長)
工藤 早苗さん(学生)
佐藤 宏美さん(一般社団法人ふくしま連携復興センター)
李匡 舜さん(在日本朝鮮留学生同盟)

○プログラム内容・成果と課題

1) 内容

趣旨説明	中川 径治 (諸注意事項を含む)
現状説明	沖縄・・・工藤 早苗さん 福島・・・佐藤 宏美さん 在日・・・李匡 舜さん
基調報告	パレスチナ・・・田中 好子さん
グループ討議	「どうすれば国内諸問題を他の方々に伝えられるか」
グループ発表	各4グループから
総括	田中 好子さん
挨拶	中川 径治
交流	18歳の高校生から60歳代のご婦人まで、沖縄、福島、在日関連の方々、そして

パレスチナを支援される方々で 27 名の参加者が集い、感動のイベントを行うことができました。

2) 成果と課題

立場が異なる方たちがあつまり、共通課題（どのように情報を伝えるか）を話し合いましたが、グループ発表では、4 グループ中、3 グループが「(一対一の) 対話」、そして最後の 1 グループが「SNS を活用した情報伝達」という発表内容でした。20 代から 30 代という若い世代が中心に集まった分科会でしたが、情報伝達のキーとして「対話」を第一に挙げている点が注目すべき内容です。

在日、福島、沖縄、パレスチナに関わる今回の参加者は、従来、互いに交流の無かった方々ですが、あえて、同じテーブルについていただき、共通テーマで討議をした時に、図らずも「対話」が大事との結論に至り、さらに、イベント終了後も、交流をし、なかなか帰路につかない方々も随分といました。迂遠の道に見えても、課題解決には、結局は「対話」という地道な道を実感していただいたと思います。

しかし、今回のイベントはゴールではなく、参加者同士の情報交流ができる仕組み（ゆるいネットワークづくり）が必要と思われますので、それを今後の課題として進めていきたいと思いました。

○参加者の声

- ・とても素敵な会でした。すてきな若い方々とか、ほんとに多種多様な立場の方々がいらして・・・東京でのボランティア活動、市民活動に対して結構ななめ目線だったのですが、見方が変わりました。今後とも、何かしら関わらせていただけたらうれしいです。

（都内任意団体会長から）

- ・本日はお招きいただきありがとうございました。大変有意義な時間を過ごすことができました。日々お忙しい中でそのような企画を作り、しかも 30 人もの応募を集めてしまう実行委員の皆様のバイタリティにはただただ脱帽します。また何かあれば、私の能力の範囲で力になろうと思っています。その際にはぜひお声かけ下さい。

（パレスチナ関連インカレ団体元代表から）

- ・いろいろな背景を持つ方々とお話ができ、考えさせられることもたくさんありました。非常に有意義な時間を過ごすことができました。ありがとうございました。

（パレスチナの大学留学経験者から）

- ・貴重な場に招いていただき感謝しています。また機会があれば一緒にできればと思います。（在日団体の方から）

○担当者・記録

《担当》 中川 径治（NEC ネットエスアイ株式会社）
 山本 智子（認定 NPO 法人パレスチナ子どものキャンペーン）

《運営サポート》柴田 健次（東京都社会福祉協議会）

《記録》中川 径治（NEC ネットエスアイ株式会社）

鹿住 貴之（認定NPO 法人JUON（樹恩）NETWORK）



12 物質的豊かさと心の貧困

～ツーリズムから見る現代社会～

○開催目的

物があふれ、何不自由なく生活できる日本にしながら、若者を中心にいじめや自殺が後を絶たず、「生きにくさ」を感じる人が増加している昨今。豊かさゆえに、私たちが見失ってしまったものとは何なののでしょうか。途上国へのスタディーツアーの現場から、現代社会を考えていきます。

○開催日時

2月13日（土）14：30～17：00

○参加者数・出演者・団体

参加者数：29名（参加者24名、出演者2名、スタッフ3名）

出演者・団体：磯田 浩司さん（NPO法人 good! 代表）

畝尾 知佳さん（NPO法人 アクション 海外ボランティア担当）

○プログラム内容・成果と課題

1 プログラム内容

1) 登壇者紹介

登壇者の自己紹介をしていただきました。

2) 登壇者パネルトーク

- ① 畝尾さんから、フィリピンの子どもたちの生活、実情についてご紹介いただきました。フィリピンの子どもたちは毎日生き抜くことが精いっぱい、今の生活の全部を続けられることが何よりの幸せです。そんな中で家族の存在は大きく、子どもたちは皆、学校を卒業し、仕事に就いたら家族を支えることが何よりの夢だ、とお話いただきました。フィリピンの子どもたちは、今、自分が持っているものに気づいている、その尊さや大きさを自覚しているように思えるといいます。一方、日本に住む私たちは、情報や物にあふれている中で、自分にとって大切なことが見えなくなっているのではないのでしょうか。
- ② 磯田さんからは、以前生徒の多くが不登校や知的障害を持つ子どもたち、という高校に勤務なさった経験から、現代社会で生きづらい若者、苦しんでいる若者たちについてお話をいただきました。不登校の子どもの多くは、閉塞感のある日本社会で生き抜くことに心をすり減らしており、ルールをひとたび外れると元に戻るのが非常に難しい社会で生きているといいます。うざい、だるい、面倒くさい、とぼやく若者達は、みな自信を失っています。そんな子どもたちも、成功体験を繰り返すことで、自信を取り戻していきます。その一つのきっかけが、海外でのワークキャンプです。未知なる世界を知ること、いろいろな価値観の中に身を置くこと、さまざまなものさしで物事を考えられるようになることが、何より大切なのではないのでしょうか。

3) 参加者のグループトーク

登壇者の方々からのお話に基づいて、各グループで意見交換をしました。途中、グループに登壇者も参加していただきながら議論を深めました。各グループで話し合われた内容をまとめ、発表をしました。

4) ワークのまとめ

グループトークのまとめや最後の質疑応答を通して、登壇者からお話いただき、分科会のまとめとしました。グループトークの内容は以下の通りです。

- ① 自分の持っているものの大切さを再認識しました。たくさんの物を持ちすぎている自分に改めて気づきました。ネット社会の現在、情報があふれ、便利さの中で生活していることで、自分を見失っているように感じます。
- ② 「出会い」の大切さを感じました。出会ってくれたことが喜びだという言葉が印象的でした。
- ③ 日本の社会は往々にして均一性を善しとし、それ以外を排除する傾向にありますが、全てを“受け入れる”ことが大切なのだと思います。
- ④ 日本は情報過多になり過ぎていて、自分が何に興味を持っているか、ということに気付けなくなっているのではないかと、思いました。
- ⑤ フィリピンでは、子どもたちが大きくなったら家族の支えになりたいという希望を持って生活していると伺いました。家族で自分が役割を担うことが、とても大切なのではないかと、思いました。

2 成果と課題

- 1) この分科会では、現代の心の貧困を“ツーリズム”を通して解明していきました。経験豊かな登壇者の方々のお話は非常に興味深く、参加者の多くの心に響くものでした。
- 2) 情報や物の氾濫によって、自分自身を見失い、いつのまにか自信を失ってしまう、それが今の多くの若者が抱えている苦しみなのではないか、彼らの自信を取り戻すためにも、さまざまな経験やいろいろな人の出会いから多様な尺度で物を見られるようになること、何より“自分自身のいろいろな感情に出会う”ことが大切なのではないか、という結論に達しました。
- 3) 課題としては、今回は“海外ワークキャンプ”を通して現代日本社会での生きづらさについて考えていきましたが、日本国内でもどうしたらこのような若者たちが自信を取り戻せるのか、というより具体的な内容を考察していければよいと思います。

○参加者の声

- ・豊かさとは何だろうと改めて考えさせられました。日本の子どもの生き難さを再認識できました。
- ・心の苦しみは、情報過多によるマヒなのだなあと改めて思いました。
- ・自分の持っている物の大切さ、出会いについて学ぶ、いろいろなきっかけになりました。
- ・とても勉強になりました。これから自分がやりたい夢を後押ししていただく機会になりました。本当にうれしかったです。

- ・講師の方のお話を聞くだけでなく、周りの方々のお話も聞くことができて良かったです。

○担当者・記録

《担当》

内田 智子（NPO 法人 ESA アジア教育支援の会）

神元 幸津江（いたばし総合ボランティアセンター）

小川 美佐子（NEC ネットエスアイ株式会社）

後藤 浩二（スープの会）

杉村 郁雄（NPO 法人日本ファシリテーション協会）

《記録》

内田 智子（NPO 法人 ESA アジア教育支援の会）



13 「はじまりの物語」

～セルフヘルプグループから「私たち」へのメッセージ～

○開催目的

マイノリティ（社会的少数者）の方々を巡る社会状況は大きく変わりつつあります。例えば、LGBT 等性的少数者の方々に関して、レインボーパレードなどの社会的な注目や渋谷区での条例づくりなども進んでいます。しかし、このボランティアフォーラム実行委員会のなかで、「自分の周りでは『認知されている』という実感はあまりない。まだまだ当事者の生活者としての肉声が、日々の暮らしのなかで聞こえてこない・語られていないからではないか？」という声が聞かれました。

東京ボランティア・市民活動センターに寄せられる相談の中身を見ると、「セルフヘルプグループ」もさまざまに多様化の動きをみせており、その存在をアピールするようになってきています。それだけに、「セルフヘルプ」を文字通り「自助」と捉えるだけでなく、「生きにくさ」を生み出す社会的な背景を社会全体で広く考える必要があるのではと実感します。

「人ごとじゃない」。その意味で「当事者性」の質を問い直し、共有・共感する「市民社会」のあり方を、市民一人ひとりが考える必要があるのではないかと思います。

この分科会での「狙い」……「市民」としての「暮らしの共感」を育む

例えば、上記であげたように、LGBT 等性的少数者の方々に関してみると、当事者運動としての広がりもみられます。また不十分とはいえ、条例化というかたちで制度・施策のサポートも少しずつ進み始めています。それに関わらず「自分の周りでは『認知されている』という実感はあまりない」という声が、なぜ出てくるのでしょうか。担当者の話し合いのなかでは、NPO 活動として当事者運動に熱心に関わる方から「日頃、職場では『着ぐるみを着た感覚』で自分を押し込めている」という言葉を打ち明けられた、という話も出てきました。身近な地域生活・日常生活においてはさまざまなコンフリクト（摩擦・あつれき）がまだまだ数多く存在するのではないのでしょうか。

この分科会では、出演者が、それぞれの活動内容というよりは、「身近な暮らし」の中から、グループが「必要だ」、活動を「はじめたい」と思った原点を語ることで、「市民」としての「共感」を育むことを目標としました。そのために、まずはこの分科会が、互いの価値観や考えの「違い」を認め合う市民社会について考えるきっかけとなればと考えます。

想定した参加者

多様な当事者団体・個人（ベテランもこれから取り組みを始めようという方も）に参加していただきたいと考えました。「はじまりの物語」をキーワードにすることで、テーマごとの違いに着目するのではなく、「共有できる何か」を探ることができるよう工夫しました。なぜ活動を始めようと思ったのか、その「原点」に注目する中で、活動内容ではなく、おのずと日常生活でのエピソードに繋がるはずだと考えました。

かつ、いわゆる「当事者運動」に直接関わっているわけではない「関心ある市民」にも広く参加していただきたいと考えました。どうしたら「市民社会へのメッセージ」として広く発信できるか、「共感できるメッセージ」を一緒に創るところから参加していただきたいと考えました。

分科会「成果物」のイメージ

- 1 「違い」に着目して細分化したり、時には対立すら生じることもあるセルフヘルプグループ・当事者運動が、互いを知り繋がり合うことで、今後も広く支えあえる関係性を生み出せるよう、そのきっかけの場となればよいと考えました。
- 2 「共感できるメッセージ」も一つにまとめるわけではなく、参加者一人ひとりにとっての「日々の暮らしのなかでの共感」として、参加者自身に持ち帰って欲しいと考えました。

○開催日時

2月13日（土）14：30～17：00

○参加者数・出演者・団体

参加者数：39名（参加者29名、出演者5名、スタッフ5名）

出演者・団体：

- ◆自身の体験から、自死遺族への差別偏見のない社会をめざす団体を立ち上げ、活動：田口まゆさん（NPO法人Serenity代表）
- ◆同性パートナーの看取りをした体験を経て、現在はLGBTの認知と理解をテーマに活動：けんたろうさん
- ◆性的強迫症からの回復をめざすセルフヘルプグループ、SCA東京グループのメンバー：タカシさん（SCA＝無名の性的強迫症者の集まり）
- ◆LGBTとの共生をめざすNPO法人グッドエイジングエールズの立上げに関わり、現在はフリーで活動：金谷勇歩さん
- ◆知人がいない場所で初めての子育てを開始。現在はママたちによるグループでも活動：赤津優子さん（6歳と7歳の子どもをもつ母親、ママサークルに所属）

○プログラム内容

1 企画意図の説明、参加者全員の「10秒自己紹介」

- ・参加者同士の繋がりへのきっかけとなるように。

2 出演者パネルトーク

- ・彼が亡くなる間際、同性愛者ということで、相手の親御さんの理解を得られず、息を引き取るときにパートナーとして隣にいられなかった。自分たち以外でこんな苦しみを受ける人がいてはいけない。自分にできることは何かと考えたとき、こうしてスピーカーとして伝えていきたいと思い、今日も登壇した。13人に1人と言われるLGBT等セクシャルマイノリティの人たちへの認知と理解を広げていきたい。

人が人に寄り添い愛するときに、年齢や性別など関係がないと、深く痛感した。LGBT等セクシャルマイノリティの人たちのことを、一人の人として見て欲しい。

- ・何かやりたいという当事者の方々の応援。

きっかけとしては、以前の同姓のパートナーが、同姓であるが故のさまざまな生活苦に直面して、

「死のうとした」ことがあった。本人のせいとはとても思えない。自分も何かできないか。そういう思いからさまざまな当事者団体の取り組みに関わるようになった。

仕事とプライベートと、団体の活動と、とっても忙しくて苦しくなるときがある。そういうときはちょっと、「降りてもよい」のかなと思う。自分も今は、共感できたり、この人っていいな、この人のことを手伝いたいな、という感性を大切にしながら関わる取り組みを整理している。

例えば、出演者の「けんたろうさん」のような当事者の声を、どう社会にメッセージとして発信していくか、そういう手伝い。自分が「応援したい」と思える人たち、そういう人と人を繋ぐ「ハブ」として、繋がりの中で新しい価値観を生み出すことをしていきたい。

- なぜ、自分がグループに関わるようになったのか、団体としての見解ではなく私自身・一個人の発言として、できるだけ正直に話したい。

中学生の頃から、性的な強迫行為が少しずつ始まる。「人とは違うと思うと同時に、これが自分だという思い」に葛藤があり、誰にも話せなかった。孤立感が深まると、強迫行為が進むという悪循環。

アディクションの一つとして「12 ステッププログラム」を使った、性的強迫症者の自助グループとの出会い。「治癒することは無いが、回復することはできる」ということをメッセージとして伝えてもらえたことで、初めて希望をもつことができた。「解決策がある」という希望が自分をがらりと変えた。

- 父親を 13 歳の時に亡くした。今思うと、そこから「お母さんの面倒はあなたがみるのよ」という周りのプレッシャーが始まる。自分の夢を語りたい思春期に、「夢を絶たれた」という思いが当時あった。母は、今も父の死に苦しんでいて、そのことも、今もなお自分のプレッシャーになる。周りからは、母の介護、相続の問題など「あなたが考えるのよ」と迫られる。

「逃げるしかない」と思って、東京に来て、自死遺族に関わる取り組みをしている。自分自身、今も苦しいが、取り組みで出会う仲間を支えられてもいる。自死の取り組みの背景には、そうした生活課題があることを知って欲しい。それは、自死遺族に限らず、誰にとっても、いずれ向き合う課題なのだということを知って欲しい。

- 2 人の子育てをしながら、仕事、サークル活動をやっている。今自分がやっていること。自分の興味の向くことに対して活動しているだけ、と思っている。それが自分自身に正直にあることだと思うし、そのことを大切にしたい。

今日のゲストの方々のお話を聞いていて、それぞれ立場や抱えているものも違うかもしれないが、皆さん「こころが向くこと」を大切にして話していらっしゃることに、共感できるところがたくさんある。

自分も、子育てしながら、毎日迷いがある。自分の一言や行動が、この子の将来を左右する、日本の将来を左右するかもしれないと思う。

子どもを育てていると「普通でいなさい」という言葉で接しがちになる。無意識に親が区別してしまう。自分の子ども時代をふり返って、そうした言葉に傷ついた体験も思い出される。「他者との違いを受け入れる」そうした教育が、これから必要なのだと思う。だからこそ、今日のゲストの皆さんの話を聞いていても、「人ごととは思えない」と思える。

3 参加者どうし「メッセージ交換」

- ・出演者の話を聞いた感想、もしくはそれを聞いて感じた自分自身の暮らしについて、3つのグループに分かれて「メッセージ交換」をしました。
- グループごとにでてきた話を、出演者も含めて全体で共有しました。

○成果と課題

「開催目的」に記した「分科会『成果物』のイメージ」と比べて考察してみます。

1 セルフヘルプグループ・当事者運動が、互いを知って繋がり合うことで、今後も広く支えあえる関係性を育むきっかけとする、という点について

最後30分のフリーでの情報交換会では熱心な情報交換が行われました。

「広く支えあえる関係性を育むきっかけ」としては大いに成果があったと思いますが、今後の課題として、やはり今回限りで終わらせないよう、連続企画等との連携が問われると思いました。

2 「共感できるメッセージ」づくりについて

出演者のテーマや関わりのスタンスなども多岐にわたったことから、「日々の暮らしのなかでの共感（違いを認め合うこと）」という点において、参加者一人ひとりが何らかの想いを持ち帰ることができたのではないかと思います。

一方で、リスクマネジメントの必要について、あらためて課題があがりました。話題提供者として出演される方は特に、大勢の前で自分をさらすことになります。この分科会内だけをみると、誰かが傷つくことの無いよう、何度も打ち合わせを重ねて配慮をしてきたつもりでした。しかし、出演者の方が、分科会が終わった後の交流会で、他の参加者から不愉快な言動を受けるという残念なことがありました。担当者として配慮の意識が足りなかったと反省しています。

しかし、「多様な『当事者性』を持ち合わせて参加する」ボランティアフォーラム参加者の特徴を考えると、たとえどの様な配慮を行ったとしても、交流会においては予想もつかない、さまざまな価値観の軋轢（あつれき）が生じることは避けられないでしょう。むしろ、その「あつれき」をどのように市民のチカラとして「糧」に変えてゆけるかが、最も大きな課題だと思っています。その点、「不愉快な言動があった事実」を分科会企画者、出演者、ボランティアフォーラム実行委員会の皆で共有できたことは、それはそれで大切な成果だったと思います。

○担当者・記録

《担当》	後藤 浩二（スーパの会） 田口 まゆ（NPO 法人 Serenity 代表） 杉村 郁雄（NPO 法人日本ファシリテーション協会） 圓藤 理江（東京ボランティア・市民活動センター） 森 玲子（東京ボランティア・市民活動センター） 安井 忍（東京ボランティア・市民活動センター）
《運営サポート》	川上 侑希子（東京大学大学院 教育学研究科）
《記録》	後藤 浩二（スーパの会）

14 「do-ing（動員）」の力学を知ろう

～自主性ある地域活動をめざして～

○開催目的

地域ではPTAや町会など、さまざまなボランティア活動があります。本来、こうした活動は自主的な参加であるべきですが、「動員」による活動も見られます。動員は活動の面白さを失わせ、人を遠ざけてしまいます。

動員とは何か、なぜ動員が起きるのか、動員から自主的な活動へ転換できるのか、自身も地域活動に関わっているゲストを交えて考えます。

○開催日時

2月13日（土）14：30～17：00

○参加者数・出演者・団体

参加者数：22名（参加者17名、出演者2名、スタッフ3名）

出演者：西川 正さん（NPO法人ハンスオン！埼玉 常務理事 / 地元・上尾市の民生委員
・PTA役員）

庄嶋 孝広さん（市民社会パートナーズ 代表 / 地元・大田区の元PTA会長
（大田区立小学校PTA連絡協議会 会長）・青少年委員）

○プログラム内容・成果と課題

1 第1部：動員の問題の根っこにあるものとは

1) 西川さんより話題提供

＊動員（民生委員・PTA）の現状…参加依頼が多い！時間が足りない！

＊NPO・市民活動とは世界が違う…「シキタリズム」

→市民活動はもともと意識が高い

→動員はずっとやってきたこと…性質として染みついている！

＊「負担感」の研究…なぜ負担感が生まれるのか

→負担感(f)の公式： $t \times a = f$

t…意味なし感、やらされ感、わからない感、キャパオーバー感、孤立感

a…ありがとう、表彰

2) 参加者を交えての意見交換

＊みんな状況が違うのに、ひとつの形を押しつけるのがよくないのでは

→行きたいか行きたくないか自分では選べない

→内部で自由に決められるならいいが、すでに「正解」があるのが一番の問題

→古いがんじがらめ感がある…「内側は女性、外側は男性」みたいな役割感

→動員はイヤイヤだが、図書ボランティアの活動は自主的に集まってくる

- * 空気を冷やすのではなく、あたためることが重要（≡雰囲気を変える）
 - 大切なのは「遊び」…ドキドキを共有できる仲間の存在
- * 行政はなぜ動員をするのか…政策の浸透には影響力ある人に呼びかけるのが早い
 - 逆に考えれば、全員が全員熱くなる必要はない
 - お金をもらっていないのに、有給の職員のために自分が行かねばならない不服感
- * 動員であっても本当に活動しているから、かえって言いにくい
 - 「来てみるとよかった」という感覚を持たせればまだいい
 - 「動員するなら（やり）甲斐をくれ！」…これなら次につながる広がる

2 第2部：地域活動は誰が担うべきか

1) 庄嶋さんより話題提供

- * 地域の活動を自分で選ぶのは大変…実は動員もアリでは？
 - 地縁系の活動…人脈を介して次の展開につながりやすい
 - NPO系の活動…地域では知られておらず次につながりにくい
- * 自治会やPTAは「硬い組織」で仕事が固定されている…やり方を変えにくい
 - 縛りがあるように見えるのは、逆に言うと誰でもやれるようにするため
 - 新しいことはボランティア（できる人が、できる時に）でやるのがよい
 - 義務と自発のバランスが重要…分担の工夫
- * 「共助」…気持ちでなりたっている（≡「自助」「公助」に比べ持続が難しい）
 - 活動している人の自己肯定感を高めることが必要
 - お互いに褒め合う、会議のやり方を変える、など

2) 参加者を交えての意見交換

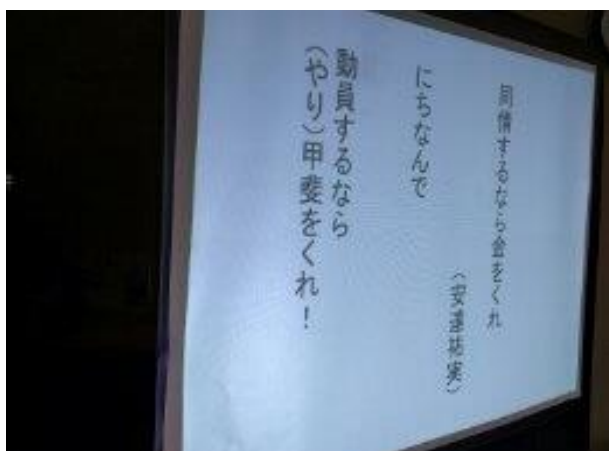
- * 地域での人材確保…人が出てきやすい雰囲気づくりや仕掛けで「確率」を高める
 - あの手この手で、できる限り多くの人に関わってもらうことが重要
- * 地縁系の活動…地域の人が仲良くなるのが目的、地域の課題解決ではない
 - 世話役・つなぎ役を通じて地域の人がつながる
- * 地域の担い手を増やすには「小さなコミュニティ」の連携が重要
 - PTAやサークルなどで人がつながっている…読み聞かせ、バレーボールなど
 - コミュニティのリーダー層を動かす…リーダーがメンバーに働きかけてくれる
 - 地域活動の構造の問題…顔が見える関係をどう維持していくか
 - 逆に、顔が見えないと権力に頼らざるを得なくなる
- * 地域活動…地域の中にいろいろな人がいることがわかるとおもしろい
 - 「仕事」と「地域活動」の割合…相乗効果が生まれるようにするとよい
 - 庄嶋さんは地域のいろいろな人がわかるのがメリット
 - 土曜は家族、日曜は地域など、地域に関わるライフスタイルを！
- * 地域の中で孤立感をなくすことが大切
 - 縦割りの仕事の割り振りを「仕事は分担、責任は共有」に…チームになる！
 - 後進を育てていくことも重要…PTA会長の役職がその人を地域の人に育てる
 - 一緒に活動する、人に紹介するなど、来た人でつくる場づくりを心がける

○参加者の声

- ・西川さん、庄嶋さんから具体的かつ論理的に動員や地域の活動の構造などを論じていただき、目からウロコが落ちた。「動員するなら甲斐をくれ」を肝に刻み込み今後仕事をしていきます。
- ・仕事を分担し責任は共有するという点が、1人の負担感を減らし人を集める力になると思いました。
- ・地域活動を運営する側の心構えがわかった気がします。その日集まった人でしかできない事をプラスしていきたいと思います。

○担当者・記録

《担当》	市川 徹（沿線ボラセン交流会）
《運営サポート》	後藤 務（NPO 法人 VCAS）
	中野 宏美（NPO 法人しあわせなみだ）
	柳澤 更沙（明治大学和泉ボランティアセンター）
	高橋 沙織（みたかボランティアセンター）
《記録》	市川 徹（沿線ボラセン交流会）



地域の担い手を考えるヒント(2) ～ 入口の工夫

- 地域活動（共助）は、「気持ち」で成り立っている。「イヤイヤやらされている」と思う人の後に続く人はいない。地域の担い手の「自己肯定感」を高めることが大事である。
- 人材確保は「確率論」（数撃ちや当たる）。人が出てきやすくなる雰囲気づくりやしかけによって、確率が高まるようにする。
 - ・ 世話役・つなぎ役の存在（大人のガキ大将）
 - ・ ハードルの低い入口（文字通りのボランティア）
 - ・ 小さなコミュニティ間の連携（PTA・おやじの会、学校、企業）



15 ボランティアを通じて学生の生きる力

(社会性・自己肯定感)を育てる

○開催目的

子どもと大人の間での存在、大学生。何かを変えようとボランティアに挑戦し、活動を通じて大きく成長していく学生もいる一方で、自己肯定感が低かったり、コミュニケーションが不得手だったり、まだまだ成長過程の学生も多くいます。どうすれば地域に貢献しながら、学生の“生きる力”を育むことができるのか。事例や話し合いの中から、育ちを応援するためにできること、大切にしたいことを見出し、プロジェクトにつなげていくことを目的とします。

○開催日時

2月13日(土) 14:30 ~ 17:00

○参加者数・出演者・団体

参加者数：25名(参加者20名、出演者2名、スタッフ3名)

コーディネーター：

村上 徹也さん(日本福祉大学サービスマネジメントセンター 副センター長)

事例発表：聖学院大学ボランティア活動支援センター

○プログラム内容

1 趣旨説明

コーディネーターの村上さんより、問題意識の共有としての事前レクチャーをいただきました。

○レクチャー内容

ボランティア活動を通じて学生たちは「コミュニケーション力」、「意見を持ち自ら動く力」、「思いやりを持ち接する力」、「計画し実践する力」を身に付けていき、それが結果として、自身の成長につながる。しかし、自分の考えを言葉で伝えられなかったり、不安ばかりで積極的になれなかったり、相手の立場に立てずもめてしまったり、誰もが簡単に活動になじめるわけでもない。

そのような学生たちの人格を否定することなく、学生自身が、また大学ボランティアセンター、受け入れ先や活動に関わる全ての人たちがハッピーな関係で学生の活動や育ちを応援し、受け入れていくためにできることを考えたい。

2 グループ分け、自己紹介

大学関係者と学生ボランティアのマッチング・受け入れ等を行っている地域からの参加者が混ざった立場の違う5人のグループをつくり、各自付箋紙を一枚手にとって、学生がボランティア活動をする際の学生の人柄に関わる課題の中で、一番悩ましいと思う事項について一つ記入し、順番に、名前と所属、付箋紙に書いた内容を紹介し合いました。

3 事例報告

学生の個性を生かしたプロジェクトと題して、聖学院大学ボランティア活動支援センターより事例報告を行いました。積極的になれなかった学生たちが、戦隊、着ぐるみボランティアとして堂々と人前に立って活動するようになったプロセスや、地域のニーズに応じていくだけではなく、活動発表等で自ら発信していく場を保证するなど、コーディネーションの工夫について紹介をしました。

○村上さんによる「事例紹介に見る話し合いのヒント」

- ・（人前に立つのが苦手という）弱みを強みにする
- ・ニーズのある側との対話を大切にする
- ・（グループで活動する、受け入れ先と学生が面識あるなど）学生を孤立させない工夫
- ・学生の成長の成果を受け入れ先にフィードバックすることが、受け入れ先の自信につながる
- ・（この活動を行うことでどのような効果があるのか）見通しを与える

4 学生の個性を活かすプログラムの検討

課題のある一人一人をどう支えていくのかという視点で、学生の個性を活かし、学生の弱みを強みに変える対応策とそこから生まれそうなプロジェクトについて考え合っ、模造紙にまとめました。グループからは下記のような意見が出されました。

○対応

- ・フィードバックをしっかり行うこと
- ・役割を作ること、気づきの場とすること

○プロジェクト

- ・研修会やボランティア講座を実施する
- ・交流でき、出会いがある場を作る



5 全体シェアリング、まとめ

○村上さんのまとめ「ボランティア活動がみんなにとってハッピーなものであるために、学生との関わりで私たちができること、大切にしたいこと」

入口

- ・興味、関心をつかむ多様なきっかけづくり。
- ・気軽に楽しく単発でも、良い体験の機会をたくさんの人に提供する。

（裾野を広げた先に、継続的に活動する学生が出てくる）

役割

- ・その人の個性に合わせてその人なりにできる役割をつくる。
- ・活動するか否か、保留にするか、その人なりの選択を保証する。

リフレクション（ふりかえり）

- ・ほめること（あなたがいたからこれができた！）、成果を確認することが、やりがいや自己肯定につながる。



- ・一人でふりかえるのではなく、いろんな人と意見交換をすることで自己相対化ができる。これがコミュニケーション力、相手の立場を理解する力を身につける原点となる。
- ・みんなでふりかえることで、みんなが包摂的な関係になれる。

○成果と課題

参加者一人ひとりの学生との関わり度合いが異なることもあり、「学生がボランティア活動をするときの学生の人柄に関わる課題」を出してから最後のプロジェクトの検討を行うプロセスで、それぞれ学生をどう見ていて、どう思っているかという話が白熱し、それぞれの視点への理解は深まりました。

しかし、学生との距離感が参加者によって異なり、学生の捉え方を同じ目線で共有することが難しかったため、具体的なプロジェクトを見いだせるグループは少なかったです。一方、さまざまな立場の人が学生について思っていること、感じていることを丁寧に語り合えたのは意義があり、その話し合いの先に、学生をどう活動に受け入れていくか、どんなプロジェクトの可能性があるか、といった具体的な話が出てくることを考えると、今回は前段で欠かせない共有ができたと考えています。

○参加者の声

- ・「生きる力」の考え方はさまざまだと思いました。アイデアを形にすることや企画力を、ボランティア活動を通じて成長させたい人が多いと思っていましたが、より基礎的な力を身に着けたいと思っている学生もいると知りました。
- ・普段言語化しないことを話して自分の中で整理することができました。
- ・学生の味方になることは大事だと思いました。自信のない学生たちがいる中で、同じ目線で協力できたら良いと思いました。
- ・情報交換の中で、今後のやるべきことが見えたような気がします。
- ・外部者なので、当事者の考えがわからず、想像しながら参加しました。

○担当者・記録

《担当》	芦澤 弘子（聖学院大学ボランティア活動支援センター）
	遠藤 信裕（なぎさ和楽苑）
	辻 陽一郎（國學院大学ボランティアステーション）
	柳澤 更沙（明治大学和泉ボランティアセンター）
《記録》	芦澤 弘子（聖学院大学ボランティア活動支援センター）

16 交流会

○開催目的

- ・「私たちがつくる 明日のピース」をテーマに、2日目までのプログラムを振り返るとともに、ボランタリーフォーラムに参加したみなさんと、新たな出会いや親睦を深める場にします。
- ・聴覚障がい者が中心となっているグループ（連）による阿波踊りを披露してもらい、参加者も一緒に楽しめます。

○開催日時

2月13日（土）17：40～19：10

○参加者数・出演者・団体

参加者数：123名（参加者84名、出演者30名、スタッフ9名）

出演者・団体：練馬区聴覚障害者協会 だいこん連のみなさん

※ だいこん連とは、阿波踊りを通して、聴覚障害に対する理解を深め、手話を社会に広めていきたいという強い思いから活動している連（グループ）です（だいこん連HPから）。

○プログラム内容・成果と課題

【プログラム内容】

- 1 オープニング映像、交流会趣旨説明、注意事項（17:40～17:45）
- 2 自己紹介ゲーム（17:45～18:00）
 - ・二人一組で「ボランティアや市民活動に関心を持った年齢」、「今は関心はないが、面白そうだと思うテーマ」、「自分が分科会を開くならこのテーマで開きたい！」というテーマを足がかりに自己紹介をして、交流をスタートさせました。
- 3 乾杯、自由交流（18:00～18:15）
- 4 阿波踊り、写真撮影（18:15～18:50）
 - ・阿波踊りには「多世代交流」や「多言語交流」など今日の市民社会における諸課題を解決するためのヒントが数多く隠されています。今回の交流会では、聴覚障害をお持ちの方々による阿波踊りのグループである「だいこん連」の皆さんに舞台を披露してもらうとともに、参加者全員で踊りました。
- 5 自由交流、終了（18:50～19:10）
 - ・前半の自由交流に続き、だいこん連の皆さんとも手話等を通じて交流を深めました。

【成果と課題】

- ・2日目までのプログラムを振り返るとともに、数々の出会いから、ともに学び、議論した仲間との交流を深め、またネットワークを大きく広げることもできました。

- ・阿波踊りの企画も参加者全員で楽しむとともに、交流会からも今後の活動につながるさまざまなヒントを持って帰っていただくことができました。

○参加者の声

- ・さまざまなジャンルで活動しているひとがいて、お互いに理解を深めることができた。
- ・だいこん連の踊りを通じて、言葉にならない部分でも交流することができた。
- ・交流にはさまざまな方法があることを改めて知る機会になった。

○担当者・記録

《担当》 土屋 弦（明治大学 法学部）
 芦澤 弘子（聖学院大学ボランティア活動支援センター）
 川上 侑希子（東京大学大学院 教育学研究科）
 高橋 義博（調布市市民プラザあくろす 市民活動支援センター）
 辻 陽一郎（國學院大學ボランティアステーション）

《記録》 辻 陽一郎（國學院大學ボランティアステーション）



17 私の、私たちにとっての家族のかたち

～「家族」って何だろう？映画『うまれる ずっと、いっしょ。』から～

○開催目的

自分にとっての家族、誰かににとっての家族とは、どんなものでしょうか。それぞれが多様な家族のかたちをとらえることができれば、社会で、地域でもっと暮らしやすくなるのではないのでしょうか。「家族」をテーマにしたドキュメンタリー映画の鑑賞とディスカッションを通し、その可能性をさぐります。

○開催日時

2月14日（日）10：00～13：00

○参加者数・出演者・団体

参加者数：40名（参加者37名、スタッフ3名）

○プログラム内容・成果と課題

1 開会・趣旨説明

2 映画鑑賞

鑑賞作品：「うまれる ずっと、いっしょ。」

映画の内容：

- ・血のつながりのない家族
- ・愛する人に先立たれる家族
- ・死と向き合う毎日を生きる家族

と、それぞれの事情に向き合う3家族の姿を通して、自分たちが生まれてきた意味や家族の絆、命の大切さ、幸せのあり方を考え、感じる作品。

3 参加者同士のディスカッション

近くの席の参加者同士で輪になり、

- ・映画を鑑賞した感想
 - ・自分にとっての家族ってどんなもの？
- というテーマで意見交換、共有しました。

4 午後の分科会の案内

引き続き“家族”や“地域”をテーマに、13:30から行う、「分科会22 “地域のかたち” “家族のかたち”の今」について、担当者から内容の紹介と案内をしました。



成果と課題

ボランティア・市民活動に参加する人、興味のある人、中間支援組織で働く人のほか、大学生や妊娠中の方、子ども連れの家族など、幅広い層に参加していただきました。さまざまな参加者がいる中で、映画を観るということだけでなく、鑑賞後に感想や意見を交換できたことで、それぞれの家族観を共有し広がりをもつことができました。

「家族という枠組みを超えた、新しい家族の形が見えてくると期待した。」という参加者からのコメントもありましたが、家族的なつながりや、心情がうまれるような場や取り組みについても、引き続き考えていきたいです。

○参加者の声

- いろいろな家族のかたち、命、絆等を学ぶことができました。これから、家族のあり方について、今一度考えてみたいと思いました。
- 家族が大切だと心から思っている、忙しい毎日を過ごす中で片隅に追いやられてしまうこともあります。今日、帰ったら実家に電話をしたいと思います。
- 映画が素晴らしかった事、最後の話し合いが、皆、思いやりがあって良かったです。
- 一人ひとりに家族の物語があることを知って家族を大切にしていこうと思いました。

○担当者・記録

《担当》	志田 五十鈴（こまえボランティア・センター）
	栗澤 稚富美（公益財団法人社会教育協会 ひの社会教育センター子育てカフェ「モグモグ」）
	中野 宏美（NPO 法人しあわせなみだ）
《記録》	志田 五十鈴（社会福祉法人 狛江市社会福祉協議会）

18 非営利組織とお金

～出し手と受け手の「意志」をひとつに～

○開催目的

NPO など非営利組織が外部から得る資金には、助成金・補助金、寄付金、融資金などが挙げられます。これらをバランスよく得るには、資金の出し手と受け手における「意志」の合致が重要となります。

この分科会では、助成金・融資金の活用事例を学び、資金の出し手と受け手の「意志」を共有する場を提供します。

○開催日時

2月14日（日） 10：00 ～ 12：30

○参加人数・出演者・団体

参加人数：28名（プログラム参加者21名、出演者4名、スタッフ3名）

出 演 者：丹保 有充さん（公益財団法人損保ジャパン日本興亜福祉財団 事務局長）

赤星 裕美さん（NPO 法人彩結び 代表）

内田 智子さん（認定 NPO 法人 ESA アジア教育支援の会）

笹沼 佑規さん（中央労働金庫）

○プログラム（内容）・成果と課題

1) アイスブレイク

分科会に参加した動機を共有するワークや、お金に関するクイズを行い、参加者同士の交流を図りました。

2) 出演者による事例発表

①助成金の出し手（丹保 有充さん）

助成財団が応募団体に期待することや、申請書を書くうえでのポイントについて説明しました。助成財団にとっての助成先は、社会課題を解決するためのパートナーです。

②助成金の受け手（内田 智子さん）

助成金を得るまでの道のりや助成金の活用事例を発表しました。また、人件費や事務所経費が、助成金の使途として認められないケースが多い点などの課題を提起しました。

③融資金の出し手（笹沼 佑規さん）

金融機関による審査のチェックポイント、融資を利用するうえで心掛けておきたい事項を説明しました。そして、NPO 向け融資の現状や課題について言及しました。

④融資金の出し手（赤星 裕美さん）

法人の立ち上げ時に融資を利用したきっかけや、融資を利用するメリットを話しました。また、融資担当者によって NPO への理解度に濃淡があるなど、金融機関への課題を提起しました。

3) 感想共有・質疑応答

事例発表を聞いた感想の共有と、発表者への質疑応答を行いました。

4) グループワーク・まとめ

分科会に参加して学んだことやこれから取り組みたいことを共有するワークを行いました。各グループには助成財団や金融機関の方が参加し、資金の出し手と受け手の意志を共有する場となりました。

○参加者の声

- ・助成金や融資金を得るには、事業の将来性やプロセスを上手に伝える技術が求められると感じました。
- ・ボランティアセンターに勤める自身の立場で、助成金や融資金の活用を検討している団体の方に、どのようなアドバイスができるかを考える機会となりました。
- ・現在大学生の私にとって、NPO への就職や NPO の設立を目指すうえで参考になることが多くありました。
- ・資金の出し手と受け手の意図することや課題について、具体的なお話をたくさん聞くことができ、大変勉強になりました。

○担当・記録

《担当》	笹沼 佑規（中央労働金庫）
	内田 智子（認定 NPO 法人 ESA アジア教育支援の会）
	熊谷 紀良（東京ボランティア・市民活動センター）
《記録》	笹沼 佑規（中央労働金庫）
	神元 幸津江（いたばし総合ボランティアセンター）





19 2020年、東京パラリンピックに向けた ムーブメント

○開催目的

2020年、東京オリンピックに続いてパラリンピックが開催されます。この大イベントに向けて東京はどのように変わっていくのか。街中や駅などが整備されてバリアフリー化がより進むのではないのでしょうか？

4年半後に向けてさまざまなアクションが始まっています。パラリンピック担当者からお話を伺いながら、私たちボランティアが今後どのように参加していくのが良いのかを知る機会とします。

また、パハリピアン（パラリンピック出場選手）をゲストに迎え、パラリンピックの魅力や開催地での取り組みについて色々と伺い、今後出来ることを考えていきます。

○開催日時

2月14日（日）10:00～12:30

○参加者数・出演者・団体

参加者数：36名（参加者29名、出演者3名、スタッフ4名）

出演者・団体：

佐藤 京子さん（2004年アテネパラリンピック 陸上女子円盤投げ 銀メダル）

秋元 妙美さん（2012年ロンドンパラリンピック ボッチャ日本代表）

齊藤 陽陸さん（東京都オリンピック・パラリンピック準備局大会準備部
パラリンピック準備課 課長）

【司会】鈴木正昭（りすこ〔おおた復興支援活動連絡協議会〕）

○プログラム内容・成果と課題

1 ガイダンス

司会者より内容の紹介と注意事項

2 ほじょ犬 の紹介

登壇者の佐藤京子さんより、同行している【ほじょ犬】の紹介と、補助犬の活動などの説明がありました。



3 東京都のパラリンピック担当者からのオリンピック・パラリンピックの概要説明

プロジェクターを使用して、2020年までに東京都が予定している主な工程や、新たに建設される選手村の紹介がありました。ボランティアに関する説明など多岐にわたる内容となりました。

4 パラリンピック出場者によるトーク

①佐藤京子さん

司会者（鈴木）の質問に答える Q&A 方式で進行
パラリンピック出場が目標となり、
選手人口が少ない競技だとその可能性が高いと
円盤投げで世界を目指した。
結果、見事に参加することができた。



佐藤京子さん

②秋元妙美さん

＊ボッチャの競技説明
ボッチャで使用しているボールの紹介、
ルールの説明など
＊パラリンピックに参加して
パラリンピックに出場した時の写真を
プロジェクターに投影しながら説明。
現地で休みの時に車椅子チームが集団で
移動したが、周りの方々の混乱は特に
生じていなかった。
海外のバリアフリー化は凄く進んでいると思った。



秋元妙美さん

5 登壇者によるパネルディスカッション

テーマ1 バリアフリーに関して

課題／今まで使用している体育館などは、
石畳などがあり車椅子などが通り難い
⇒整備できるところは随時行なうが、さま
ざまな制約があり全てに対応するのは不可。
「心のバリアフリー」で皆さんが対応を
心掛けて行くのが重要。

テーマ2 ボランティアに関して

オリンピック、パラリンピック開催に向けて
各ボランティアの協力は不可欠。
それぞれの活動は組織化して動き出している。
ボランティア活動をしたい方は、募集要項は
今後東京オリンピック・パラリンピック準備局のホームページなどに掲載予定
なので是非チェックをお願いしたい。



○参加者の声

- 実際に活躍されたお二人の話をお聞きすることができて大変参考になりました。障がいのある方も暮らしやすい街づくり、スポーツ環境ができるよう行動したいと思います。
- 選手の方々や運営に携わる方の話を聞いてとても良かったです！勉強になりました！
- 今まで知らなかったことを知ることができ、一市民としてだれもが生きやすい社会にしていかなければならないと思いました。
- 障害をもった方の介助を、すべての人が普通にできるようになることが、東京オリンピックの成功につながると思いました。
- 内容が大変素晴らしかったです。時間が少し長いように感じました。
- 初めてパラリンピアンのお話を聞きました。私の心のバリアがフリーになった感じがします。

○担当者・記録

《担当》	鈴木 正昭（りすこ〔おおた復興支援活動連絡協議会〕）
《運営サポート》	阿部 恵美子（調布市市民プラザあくろす 市民活動支援センター）
	上岡 夏海（社会福祉法人白十字会 白十字ホーム）
	高橋 義博（調布市市民プラザあくろす 市民活動支援センター）
	土屋 弦（明治大学 法学部）
	榎本 朝美（運営ボランティア）
《記録》	鈴木 正昭（りすこ〔おおた復興支援活動連絡協議会〕）

20 みんなで作ろう！「明日のピース」

～ 障害のある方々とアート作品をつくってみよう！～

○開催目的

ボランティアフォーラム TOKYO2016 の全体テーマは「私たちがつくる あしたのピース」。戦後70年、“平和”が叫ばれている今、誰もが市民の一人、つまりワンピースとして、地域社会を自らつくりあげよう、そんな思いが込められています。

日頃から芸術活動を行っている知的障害を持つ方々と一緒に、あなたの“ワンピース”を作りませんか？

来場者のみなさんにもご協力をお願いし、大きな作品にしたいと思います！

※ できあがったアート作品は、10階に展示させていただき、クロージングで紹介します。

○開催日時

2月14日（日）10：00～ 12：30

○参加者数・出演者・団体

参加者数：21名（参加者16名、出演者2名、スタッフ3名）

出演者・団体：知的障害のある方々

猫沢 八郎さん（白線画家）

浅野 日奈子さん（社会福祉法人東京都知的障害者育成会
新宿区立新宿生活実習所 所長）



○プログラム内容・成果と課題

プログラム内容

1 登壇者活動紹介

- ・浅野さんが所長を務める、新宿区立新宿生活実習所でのアート活動、日常の取り組みなどをご紹介していただきました。
- ・白線画家としてご活躍する一方、地域の小学校や幼稚園での子どもたちとのコラボレーション、また新宿生活実習所での障害のある方々のアート作品プロデュースもしていらっしゃる、猫沢八郎さんをご紹介しました。

2 みんなで作品を製作

- ・猫沢さんのご指導のもと、障害のある方、ない方、入り混じって4つのテーブルに分かれ、作品づくりに取り掛かりました。各々さまざまな形の”ピース”にクレヨンで思いおもいの絵を自由に描いたり、塗ったりしました。
- ・出来上がった一つひとつのピースを裏返し、パズルのように、みんなで組み合わせていきました。
- ・つなぎ合わせたピースをひっくり返し、作品が完成！

3 感想を一人ひとり発表していただく

- ・みんなで作品を見ながら、参加者全員に一言ずついただきました。

成果と課題

参加者全員に、障害のあるなしに関わらず、楽しんで参加していただけたので、会場全体に一体感が生まれました。お互いに声かけをし合ったり、おしゃべりをしたりしながら和やかな雰囲気で作りが進み、出来上がったものには、それぞれの想いや感情が込められていました。

成果としては、参加者が同じ時間を共有し、共に活動することで、お互いを理解し合えたことです。

そのお互いを理解し合った体験を、その場だけで終わらせず、それぞれの日頃の暮らしや地域に持ち帰っていただき、それぞれが実践していただくことを希望しています。

○参加者の声

- ・ みんなで一緒に作業をしていると、障害のあるなしは関係なくなって、さらにお互いが理解し合っていく実感があった（ご自身のきょうだいに障害のある方がいらっしゃる方から）。
- ・ 絵を描くことが大好きなので、楽しく参加できてよかった（障害のある方から）。
- ・ 障害のある方々と触れ合うのは初めて。とにかく楽しかった。そして出来上がった作品は、場を共有したみんなで作り上げたものだと思うと、大変感動した。

○担当者・記録

《担当》	新部 聖子（スーブの会）
《運営サポート》	柴田 健次（東京都社会福祉協議会）
	宮崎 雅也（社会福祉法人 日野市社会福祉協議会）
	小杉 弘美（運営ボランティア）
	熊谷 紀良（東京ボランティア・市民活動センター）
《記録》	新部 聖子（スーブの会）
	柳澤 更紗（明治大学和泉ボランティアセンター）



21 外国にルーツを持つ子どもたちのキャリアを考える

○開催目的

日本で暮らす外国人登録者数は約 210 万人を超え、学校で学ぶ外国籍の子どもたちは 8 万人を超えます。学校生活の中で、語学や文化、習慣のギャップを埋めるために、各地域・自治体でも、日本語教室などの取り組みは徐々に進んできました。

一方で、子どもたちの卒業後のキャリアに関する支援はまだまだ進んでいません。多様な背景を持つ子どもたちの可能性を大切にしながら、今後、彼ら自身が自らの力でキャリアを選択できるためのサポートについて考えていきます。

○開催日時

2 月 14 日（日）10：00 ～ 12：30

○参加者数・出演者・団体

参加者数：31 名（参加者 26 名、出演者 2 名、スタッフ 3 名）

出演者・団体：田中 宝紀さん（NPO 法人青少年自立援助センター 定住外国人子弟支援事業部）
上田 英司さん（NPO 法人 NICE）

○プログラム内容・成果と課題

●プログラム

・自己紹介

（名前/所属/今日参加をした理由/外国にルーツをもつ子どもたちとの関わり）

・外国にルーツを持つ子どもたちの現状について紹介

田中 宝紀さん（NPO 法人青少年自立援助センター 定住外国人子弟支援事業部）

・当事者の声

日本で暮らすネパールにルーツを持つ方に、日本での生活についての話を伺う

・グループワーク

（話を聞いた感想/自分が考えている課題/これからやっていきたいこと）

●日本で暮らす外国にルーツを持つ子どもたちの現状

- ・2010 年国勢調査によると、同居する親の両方またはどちらか一方が外国人である、外国にルーツを持つ子ども・若者たちが約 183 万人に及んでいます。公立学校における日本語指導が必要な児童生徒数は、年々増加傾向にあり、早急な対応を必要とされています。
- ・外国にルーツを持つ子どもたちが抱える課題としては、まずは言語の問題があり、さらに、日本に移住をしてきて、生活環境が変化したことによる心の不安や家庭環境・生活への不安を抱えています。
- ・日本語教室は広がってきていますが、一方で就労支援はまだまだ広がりが少なく、教育支援と就労支援の違いを明確にしていく必要があります。
- ・就労支援と就業支援は異なるので、働く／働き続けるための支援を考えていかなければいけません。

●成果と課題

- たくさんの外国にルーツをもつ子どもたちが日本国内で暮らしていて、さまざまな生活課題を持っていることを多くの方に知ってもらえました。
- 分野や組織を超えた連携について、考えるきっかけとなりました。
- キャリア支援というところでは、まだグッドプラクティス（優れた取組）も少なく、日本各地で支援の差があることが分かり、継続的に議論が必要であることがわかりました。
- 高校進学後の定着のための支援や、長い人生における働き続けることのできる環境も考えていかなければなりません。

○参加者の声

- 外国にルーツを持つ子供の支援の仕方を聞くことができ、今まで知らなかった課題点を知ることができ貴重なお話でした。
- 外国にルーツを持つ人たちをどのように支援するか考えるきっかけになりました。
- 「外国にルーツを持つ子供たち」の定義の理解ができました。高校に進んだ後の支援の大切さを知りました。
- 外国にルーツを持つ子どもたちがどこで苦労しているか、市民一人ひとりが認識し主体的に受け入れる仕組みを作る一員になりたいと思います。

○担当者・記録

《担当》	上田 英司（NPO 法人 NICE）
《運営サポート》	小川 美佐子（NEC ネットエスアイ株式会社）
	奥貫 泰行（運営ボランティア）
《担当》	上田 英司（NPO 法人 NICE）
	高橋 沙織（みたかボランティア・センター）



22 “家族のかたち” “地域のかたち” の今

○開催目的

家族にはいろいろなかたちがあります。私たちや子どもたちが安心して暮らすために、地域とどのように繋がっていったらよいのでしょうか？家族に寄り添う支援や取組みを紹介しながら、家族の多様性を見つめ、社会との関わりについて探ります。

温かい飲み物と軽食を用意し、リラックスした雰囲気の中でみなさんと語り合います。

○開催日時

2月14日（日）13：30～16：00

○参加者数・出演者・団体

参加者数 29 名（参加者 23 名、出演者 2 名、スタッフ 4 名）

出演者・団体 新部 聖子さん（スープの会）

栗澤 稚富美さん（公益財団法人社会教育協会ひの社会教育センター
子育てカフェ「モグモグ」）

○プログラム内容・成果と課題

1 出演者の活動紹介

現在の子育てをとりまく現状をお伝えした後、子育てひろば「子育てカフェモグモグ」の施設紹介、そこで出会った親子のエピソードなどを話したり、スープの会の活動や、いろいろな世代が集まる風まちサロンの取り組みの話から、なぜ今地域のちからが大切なのかを考え、家族にはいろいろなかたちがあってもいいのではないかと問題提起しました。

2 質疑応答

3 グループトーク

地域の課題をあげたり、家族、自分たちの身近にあることで、私たちにできること、今行っている活動をさらにどう深めていくかなど、それぞれが感じ、考えていることを話し合い意見交換しました。



4 全体共有

グループごとに代表者に発表してもらいました。話し合ったことを共有することで、新たな気づきもありました。

○参加者の声

- ・「新しい地域、家族のかたち」についてグループで共有できた。昔のような地域に戻るのではなく、今の時代に合った「かたち」を摸索していくことが大切なんだと思いました。
- ・お二人の話からは地域の中で見守り合い、支え合って、孤立しないつながりをつくることの大切さを学んだ。グループの中でも自分がしんどかった時に支えてくれたのは、身近な家族ではなく、遠くの親せきとの LINE だったという話があった。家族がいても孤立する場合もあるし、逆に家族がいる事でしんどい場合もある。血のつながりだけでない、支え合いのかたちが大切だと感じた。
- ・今後の方向性の参考になりました。
- ・今まで知らなかった NPO の活動を、この分科会を通じて知りました。決まった関係だけでなく、いろいろな人たちが一緒に何かをしようというゆるやかな人間関係を築く場というのは、家族のかたちが多様化している今、とても必要なのではないかと思います。



○担当者・記録

《担当》	栗澤 稚富美（公益財団法人社会教育協会ひの社会教育センター 子育てカフェモグモグ）
	新部 聖子（スープの会）
	志田 五十鈴（こまえボランティア・センター）
《運営サポート》	柴田 健次（東京都社会福祉協議会）
《記録》	栗澤 稚富美（公益財団法人社会教育協会ひの社会教育センター 子育てカフェモグモグ）
	脇田 恵（東京ボランティア・市民活動センター）

23 ソーシャル界の“スティーブ・ジョブズ”ここにあり

～IT テクノロジーによる社会課題解決～

○開催目的

民間が営利目的で開発した IT テクノロジーを応用し、社会課題を解決する取り組みが、進められています。

この分科会では、IT 活用のエキスパートが、参加者に事業アイデアのヒントを提供、その後グループで、事業を考えるワークショップを行いました。



○開催日時

2月14日（日）13：30 ～ 15：30

○参加者数・出演者・団体

参加者数：24 名（プログラム参加者 19 名、出演者 2 名、スタッフ 3 名）

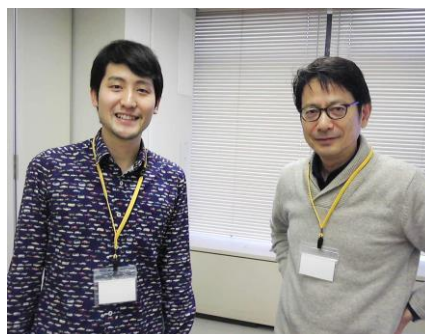
出演者・団体

今井 武さん

（株式会社アマネク・テレマティックデザイン
代表取締役社長）

薄井 大地さん

（NPO 法人 e-Education 事務局長）



○プログラム内容・成果と課題

1 IT テクノロジーで社会課題を解決した人々の話

- ・事業紹介、発想法（社会課題の発見から、なぜこのアイデアに至ったのか）、リリース・運用・その後の展開に至る経緯等をお話しいただきました。

・今井 武さん

東日本大震災時、本田技研工業株式会社でインターナビを担当していた今井さんは、「通行情報実績マップ」や、津波に襲われる都市を再現したデジタルマップで、被災地の復興に大きく貢献しました。

そして、震災から 19 分後には、カーナビに向けて発信していた津波警報が、ユーザーには全く伝わっていなかった経験を踏まえ、ホンダ卒業後、アマネク・テレマティクスデザインを創設。2016 年 3 月、災害時にも情報が届く、日本初のモビリティ専用のデジタルラジオ放送局「i-dio（アイディオ）」のサービスがスタートします。

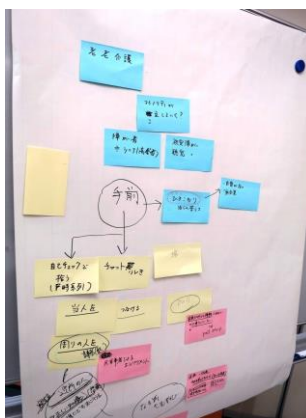
・薄井 大地さん

「最高の授業を世界の果てまで届ける」ことを目標に、貧しい子どもたちの夢を応援する映像教材を提供する NPO 法人 e-Education。1 人の大学生が、予備校のサテライト授業を応用し、バン格拉ディッシュに DVD の授業を届けたことが、団体創設のきっかけとなりました。

社会課題に気付く人は少なくない一方で、その解決に向け、事業を立ち上げ、行動できる人は少ないことを指摘。「若者（だけでない）」「よそ者（だけでない）」「バカ者（で終わらせない）」による取り組みが、組織の実績と事業の拡大につながっています。

2 グループに分かれ、IT テクノロジーを 応用した事業を考える

- ・4 グループから、現代社会の課題を切り取る提案がありました。「縁」「インターネット新聞」「場づくり」、そして最も評価の高かったのは、「引きこもりの若者たちへのアプローチ」でした。



○参加者の声

- ・講師お二人の話しが大変面白かった。社会的意味のある取り組みに感動しました。
- ・映像などもとても面白く、映像という視点から教育や震災等について考える事ができて、とても面白かったです。どうもありがとうございました。
- ・ITに限らず、課題解決についてよいヒントをもらえました。年齢性別職業全く違う人とのグループワークが新鮮で楽しかったです。

○担当者・記録

《担当》	中野 宏美（NPO 法人しあわせなみだ）
	枝見 太朗（財団法人富士福祉事業団）
《運営サポート》	市川 徹（沿線ボラセン交流会）
《記録》	中野 宏美（NPO 法人しあわせなみだ）

24 多様な非営利組織で働く多様な人びと

～NPO の価値を問う～

○開催目的

多様な価値観、多様な生き方が認めあえる社会こそ、豊かな社会。そんな社会の実現に必要なものの1つ、それがNPOではないだろうか。企業と何が違うのか、これからの社会にNPOがどう関わっていくべきなのか。

本分科会では、経歴もやっていることも異なる非営利組織で働く人びとの話から、非営利組織の存在意義を明確にすると同時に、次世代につなぐために現状の課題を整理し、解決への糸口を参加者と一緒に考えます。

○開催日時

2月14日（日）13：30～16：00

○参加者数・出演者・団体

参加者数：40名（参加者28名、出演者4名、スタッフ8名）

出演者・団体：内田 智子（ODA 実施機関⇒NPO）

神元 幸津江（グローバル企業⇒ローカル NPO）

笹沼 佑規（民間非営利団体一筋）

高橋 義博（町工場⇒企業⇒NPO）

○プログラム内容・成果と課題

1 出演者からのお話し

○4人の出演者から、所属している団体と仕事内容、そこで働くきっかけ、やりがいなどを自己紹介含めて話していただきました。

- ・学生時代からの夢、自己分析をした結果の選択、キーワード検索で見つけた等、非営利組織で働くきっかけはさまざまでしたが、全員が今の仕事に価値を見出し、やりがいを持って仕事に臨んでいました。

2 シンポジウム&質疑応答

○非営利組織の課題について、シンポジウム形式で整理していただきました。

- ・自己資金の確保、組織基盤の弱さ、世代継承の難しさ。
- ・行政からの委託も増えているが、その専門性を認められてというよりも、コスト削減という面も否めない事。
- ・NPOがまだまだ社会的に認知されておらず、NPO＝ボランティア＝無償（格安）といったイメ



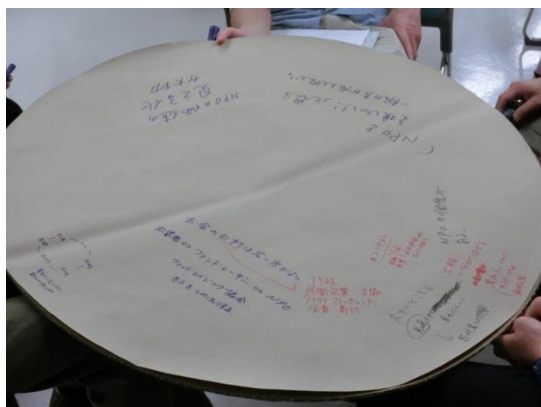
ージが強い事。

- ・給与面や職務体系を考えると、学生の就職先としては不安がある事などが課題として上がりました。
- ・参加者からは、行政からの委託期間が長くなったり、事業が安定してくると現場のスタッフやボランティアと、理事など管理者との間で意志の疎通が難しくなるといったお話や、学生からは、やはり給料が安くて生活が大変なのか、といった質問もありました。

3 グループディスカッション

○「NPOの価値を上げるには？」をテーマに、円卓型のダンボール紙を用いてグループで話し合いました。

- ・価値ある事をしている、とは思うが、具体的にNPOが何をしているのか分からない。NPO側からもっと何をしているのかを発信する必要がある。
- ・社会的認知が低いので、もっとメディアなどを使って周知してはどうか。
- ・NPOコンテストなどを開催してはどうか。
- ・企業とNPOの役割の違いをもっと社会に知ってもらわなければならない。
- ・助成金とかだけではなく、もっと幅広く収入源を持った方がいい、などなど多くのヒントとなる意見が出ました。



◎ ふり返って

非営利組織をテーマとした分科会を企画する中、集まった実行委員メンバーで自分たちの感じている思いや悩みを共有しているうちに、この話し合い自体を参加者と共有してはどうか、という流れになりました。そのため、登壇者全員が実行委員という珍しい分科会となりましたが、実体験に基づく課題提起ができたのではないかと、思っています。

非営利組織で働く人びと自身が、もっとオープンに自分たちの思いや価値を社会に訴え、共感してもらう人を増やす必要がある事。とはいえ、予算も少なく少人数のNPOも多い中、中間支援組織の役割も重要なのではないかと、自分たち自身も気づきや学びの多い分科会となりました。NPOでインターンをしている学生が、「新卒でNPOに入っても役に立たないと思うから、社会で経験を積んで将来的にNPOで働きたい」といった言葉にハッとしました。少数精鋭で頑張っている団体も多い中、そんな頑張っている大人の姿を若い人たちに見せていくのも我々のすべきことだな、と。

○参加者の声

- ・NPO/NGOとして活動する大変さがよく分かりました。自分たちの会も、社会に向けてどう啓発し

ていくか悩むところです。

- 自分の中でのNPOに対する考え方も変わり、社会の中でのNPOに対する考え方も変えていきたいと思いました。
- 制度からあふれた社会のニーズを満たすためのNPOの大切さが分かりました。
- グループ分けしての意見交換で、いろいろな人の話が聞けて良かったです。
- 働く方の生の声に触れることができました。NPOで働きたいという学生が沢山いたことにも大変刺激を受けました。

○担当者・記録

《担当》	神元 幸津江（いたばし総合ボランティアセンター）
	内田 智子（認定NPO 法人ESA アジア教育支援の会）
	笹沼 佑規（中央労働金庫）
	高橋 義博（調布市市民プラザあくろす 市民活動支援センター）
《運営サポート》	増平 貴之（NPO 法人日本ファシリテーション協会）
	筋 清（運営ボランティア）
《記録》	神元 幸津江（いたばし総合ボランティアセンター）
	小川 美佐子（NECネットエスアイ株式会社）

25 “きょうだい”Café

～語り合おう、障がい者のきょうだいのこと～

○開催目的

障がい者のきょうだいはどんな思いを抱えて生活しているのか、その思いが公に語られることはほとんどありません。きょうだいであることを隠して暮らしている人もいます。この分科会では、きょうだいが自らの不安や思いをさまざまな人と共有する機会を設けるとともに、きょうだい自身の持つポジティブな力で、新しいつながりを作ることを試みます。

○開催日時

2月14日（日）13：30～16：00

○参加者数・出演者・団体

参加者数：41名（参加者35名、出演者4名、スタッフ2名）

出演者：川上さん（大学院生 23歳/弟が自閉症）

内海さん（大学生 23歳/弟が自閉症）

高橋さん（社会人 23歳/弟が自閉症）

鵜澤さん（社会人 25歳/姉がダウン症）



○プログラム内容・成果と課題

1 アイスブレイキング

2 登壇者のお話

- ・各登壇者がきょうだいとの体験や現在の思いについて話をした

3 参加者とのグループトーク

- ・登壇者の話を聞いた感想
- ・分科会への参加動機
- ・自身の体験や思い
- などについて自由に話し合った

4 感想のシェア

- ・各グループの代表が、分科会の感想を話し、全体で共有した

＜ねらい＞ この分科会は、以下の３点を狙いとして開かれました。

- ① きょうだいのことを、さまざまな立場の方に知ってもらうこと
- ② きょうだい同士のつながりを作ること
- ③ （きょうだい以外で）きょうだいに興味のある方も含めてつながること

＜成果＞ 従来のきょうだいの集まりと言え、参加資格がきょうだいの立場の人に限られ、また話題も重い話が多く、暗い雰囲気になりがちでした。一方、本分科会では、きょうだいだけでなく、親や友人、恋人、仕事で障がい者の家族と関わっている人、興味のある方など、さまざまな立場の人に参加していただきました。その結果、きょうだいの話に閉じてしまうことなく、さまざまな立場の意見や思いにまで開かれた分科会となりました。きょうだいにとっては、自身の思いをさまざまな立場の人に聞いてもらい、他の立場の人の思いや意見を得る場に、きょうだい以外の方にとっては、きょうだいの思いを知り、きょうだいについて共に考える場になったと思います。カフェのような雰囲気にしたのも功を奏し、終始和やかな雰囲気で分科会を終えることができました。

また分科会終了後に、ここでできたつながりを絶やさないために、分科会参加者の facebook のグループページ【“きょうだい” Café】を作成しました。用途については、現在模索中です。

＜課題＞ 本分科会で新たにできたつながりを、今後どのように具体的な活動につなげていくか。今、上がっている具体的な案としては「きょうだい Café」の第２弾を開くこと、映画を撮ることなどがあります。

○参加者の声

- ・今まできょうだいとして言えなかった思いなど、話すことができ、話を聞いて気持ちが楽になりました。ありがとうございました。
- ・いろいろな兄弟会に行きましたが、そこでは兄弟の人だけしかいませんでした。今回は、部外の方、当事者の親の方の意見が聞けてよかったです。
- ・ご兄弟やご両親の生の声を聴く機会はなかなかないので、とても勉強になりました。
- ・むすこ（自閉症）と娘がおり、いつも娘のことが気がかりでした。本人に直接きくことができずにいたので、本日はいろいろな話がきけ、大変良かったです。ありがとうございます。
- ・いろんな家族があって、それぞれ大変、話をきいたり共感できる場は本当に貴重だと思いました。

○担当者・記録

《担当》	川上 侑希子（東京大学大学院 教育学研究科） 高橋 沙織（みたかボランティア・センター） 新部 聖子（スープの会）
《運営サポート》	田口 まゆ（NPO 法人 Serenity）
《記録》	川上 侑希子（東京大学大学院 教育学研究科） 後藤 浩二（スープの会）



26 中学生・高校生、施設・団体と地域をつなぐ

○開催目的

現在、中学生・高校生のボランティア活動は広がりを見せ、日本国内のみならず海外の支援活動も行っています。しかし、その活動は特定の人にしか広がっていないことも事実です。この分科会ではそのような中学生・高校生が、今、どのようなボランティア活動をしているのかを共有し、中学生・高校生とボランティアを提供する施設・団体と地域をどうつなぐかを話し合う場にしたいと思います。

○開催日時

2月14日（日）13：30～16：00

○参加者数・出演者・団体

参加者数：79名（参加・出演者69名、スタッフ10名）

出演者・団体：

都立南平高等学校

順天中学校・高等学校

都立新宿山吹高等学校

東京女学館中学校・高等学校

都立練馬高等学校

都立第五商業高等学校

遠藤 信裕さん

（社会福祉法人東京栄和会なぎさ和楽苑）

小野 明子さん（東京ボランティア・市民活動センター）



○プログラム内容・成果と課題

1) 各校発表

- ① 南平高校からは、宮城県石巻西高校交流プログラムなどの発表があり、石巻に実際に行ったときの報告がありました。
- ② 順天高校からは、東北訪問を行った際の現地の様子・状況などの報告がありました。
- ③ 新宿山吹高校からは、猫の保護や環境整備についての発表がありました。
- ④ 東京女学館高校からは、フィリピンへ訪問した時の活動などの発表がありました。
- ⑤ 練馬高校からは、地域の夏祭り・秋祭りでの活動などの発表がありました。ボランティアから学んだことや反省点の報告もありました。
- ⑥ 第五商業高校からは、地域イベントでのボランティア活動についての発表がありました。

2) グループワーク 【自己紹介、発表の補足・感想 等】

グループに分かれ、グループリーダーを中心に「TOCAS」（アイスブレイク用カード）を用いてアイスブレイクを行いました。その後、発表についての質疑応答や感想等についてグループワークをしました。

3) グループワーク 【テーマについての話し合い】

各グループで、グループリーダーを中心に今回のテーマについて話し合いました。

◎成果と課題

中高生から各学校の先生、地域の方々など、幅広い年齢層の方たちが集まって開催したため、さまざまな意見を交換することができました。TOCAS を用いたアイスブレイクもしっかりできて、各グループでそれぞれの想いを交換できたと思います。この共有できた想いをこの分科会にとどめるのではなく、ボランティア活動についていろいろな人に知ってもらうことが次の課題となります。

○参加者の声

- ・自分が考えていたボランティアとは違うボランティアがあって驚きました。
- ・いろいろな人とかわかることで得るものがたくさんありました。
- ・生徒を支える大人も必要だと感じました。
- ・いろいろなボランティア活動があることが分かりました。
- ・自分の考えていたことがすべてじゃないことを学びました。今回の話し合いで得たものをこれから活用していきたいです。

○担当者・記録

《担当》	後藤 務（NPO 法人 VCAS）
	土屋 弦（明治大学）
	遠藤 信裕（社会福祉法人東京栄和会 なぎさ和楽苑）
	小野 明子（東京ボランティア・市民活動センター）
《運営サポート》	岩田 凌（日本電子専門学校）
	田丸 精彦（NPO 法人 VCAS）
	小杉 弘美（運営ボランティア）
	榎本 朝美（運営ボランティア）
《記録》	塙 大輝（順天高等学校）
	高村 浩美（順天高等学校）

27 クロージング

～みんなでつくる あしたのピース～

○開催目的

ボランティアフォーラム TOKYO2016 のクロージングとして、全体テーマである「あしたのピース」をみんなで考えます。「平和な暮らし」は、地球で暮らすすべての人たちの願いです。その平和な暮らしは、私たち一人ひとりが主体となって、地域社会をつくっていくことから始まります。私たち自身がひとつのピースとなって、他の人たちのピースと重なりあい、どんな社会を描いていくかを考えます。

分科会での熱い思いをもって、直接かけつけてください！分科会 NO.20「みんなで作ろう！『明日のピース』～障害のある方々とアート作品をつくってみよう！～」で作成された作品の展示も行います！

○開催日時

2月14日（日）16：10 ～ 17：00

○参加者数・出演者・団体

参加者数：66名（参加者61名、出演者2名、スタッフ3名）

出演者・団体：山崎 美貴子さん（東京ボランティア・市民活動センター 所長）

上田 英司さん（NPO 法人 NICE）

○プログラム内容・成果と課題

クロージングでは、フォーラムの中で学んできたことや、「あしたのピース」に対して自分たちがどんなことができるかを、各グループで共有しました。



●参加者の方のコメント

- ・企業で長く勤めてきたが、企業のなかで弱みを見せることは、絶対してはいけないことでした。しかし、ボランティアフォーラムに参加をして、弱さがあることや弱さを見せることは、決してネガティブなことではなく、多くの人たちがその弱さを支えあうことの大切さを実感しました。
- ・まだまだ市民が主体となって取り組むべきことはたくさんあると感じました。しかし、スーパーマンである必要はなく、さまざまな人たちの持ち味を活かして、それぞれが活躍できる社会を目指していくことの大切さがわかりました。

- ・公募企画に応募をして、普段から考えていることを、フォーラムという場で実現できたことは、非常に貴重な機会となりました。その日常的な課題を、実際にアクションとして行動に移すことができたフォーラムの場に感謝をしています。

●山崎美貴子さんのコメント

- ・「平和な暮らし」とは、どのような暮らしなのか。ボランタリーフォーラムが開催された今日、長くボランティアセンターの運営委員長を務めてくださった仲村優一先生が逝去され、その偲ぶ会が開催されました。仲村先生は、戦後日本の社会福祉教育や、ソーシャルワーク研究・実践に多大なリーダーシップを発揮され、「平和」な社会の実現を強く願っていらっしゃいました。今回のフォーラムのテーマが「あしたのピース」ということで、仲村先生の意思を引き継いでフォーラムが実施されていることを非常にうれしく思います。
- ・一人ひとりが「平和な暮らし」を実現するために、地域社会のコミュニティがもっともっと多様性を認めるダイバーシティの実現や、望まず孤立してしまっている人たち、ひとりぼっちになってしまっている人たちをなくすための活動が求められています。

●まとめ

- ・私たち一人ひとりが、社会の担い手であることを自覚し、さまざまな場でその実現ができることを広く知って、行動をしていける環境をつくっていかねばいけないと感じました。多様な活動を認め合い、高めあえる場に、フォーラムが継続してなっていくことを期待したいです。

○担当者・記録

《担当》	上田 英司（NPO 法人 NICE）
	鹿住 貴之さん（認定 NPO 法人 JUON（樹恩）NETWORK）
	神元 幸津江さん（いたばし総合ボランティアセンター）
《運営サポート》	圓藤 理江（東京ボランティア・市民活動センター）
	森田 美穂（東京ボランティア・市民活動センター）
	川崎 淳哉（運営ボランティア）
《記録》	上田 英司（NPO 法人 NICE）



28 ごみ拾いから見る社会課題

～夜の新宿・歌舞伎町へ～

○開催目的

繁華街には、ごみの問題だけではなく、さまざまな社会課題も潜んでいます。初めに歌舞伎町の歴史や背景を聞き、実際に街に出てごみ拾いを行うことで、ごみだけに集中するのではなく、街の様子や街を歩く人びとを眺めてもらうことを意識しました。普通に歩いているだけでは気づかない問題に、ごみ拾いを通して気づいてもらうこと。各自がごみ拾いをしながら感じたことを参加者同士で話し合う事で、新しい関心事や次の一歩につながるヒントが見つければ、と思い企画しました。

○開催日時

2月12日（金）19：00～ 21：00

○参加者数・出演者・団体

参加者数：22名（参加者18名、出演者1名、スタッフ3名）

出演者・団体：新部 聖子さん（スープの会）

○プログラム内容・成果と課題

1 登壇者からのお話

○歌舞伎町の歴史や成り立ちについてのお話

- ・歌舞伎町一帯だけでもお店が4千軒あるといわれているが、もともとは関東大震災で被災された方が多く避難して、そのまま住宅街となっていたこと
- ・第2次世界大戦後、町の復興のために歌舞伎の演舞場を誘致しようと計画し、町の名前も「歌舞伎町」とされたが、最終的に建設されたのは新宿コマ劇場のみで、その後は「東洋一の歓楽街」として栄えていったこと
- ・繁華街の中には家族で暮らしている方もおり、中には70年近く住んでいる方もいること、など初めて聞く話がたくさんありました。

2 いざ、ごみ拾い！（フィールドワーク）

○3人1組でのフィールドワーク

- ・まずは飯田橋から新宿への移動中に自己紹介
- ・新宿西口に集合後、新宿大ガード付近からごみ拾いをスタート
1人がごみ拾い、1人がゴミ袋、もう1人がナビゲーションを担当
- ・歌舞伎町（靖国通り～さくら通り～花道通り）からゴールデン街を抜けて、新宿区役所前でごみ拾いは終了



- ・新宿大ガード下には、路上生活者の方が多く、普段から路上生活者の支援を行なっている参加者が話しかけると、通りすがりの人も驚いた顔をしていました。
- ・金曜の夜で人が多く、ごみ拾いも大変でしたが、逆に嫌な顔をされることもなく、通りすがりのお店の人に「ご苦労様」と声をかけられたりもしました。
- ・風俗店の無料案内所の上に託児所があったり、若い人が行くお店があったりと、種々雑多な雰囲気でした。
- ・拾ったごみは圧倒的にタバコの吸い殻とペットボトルでした。タバコは火がついたものも多く捨てられていました。



3 参加者とのグループトーク

○グループでごみ拾いや新宿歌舞伎町のまちな様子など、感じたことを共有

- ・幅広い年代の参加者でしたが、「怖い」と思っていた歌舞伎町のイメージが変わった、歌舞伎町は夜がキレイ、「夜の街」なんだ、という意見もありました。
- ・あまりにもタバコの吸い殻が多く、携帯灰皿の普及やタバコステーションの設置が必要では、という意見も多くありました。

◎ ふり返って

ごみを拾いながら歩いた町の様子や拾ったごみから、歌舞伎町のことを考えてもらえたとは思いますが、移動もあるため、ごみ拾い自体の時間やグループディスカッションの時間がとても短く、物足りなかった方もいるかと思います。それでも、これから自分の住む町や出かけた先で、どんなごみが落ちているのか少し気にしてみたり、町の様子から少しその町のことを想像してみたいと思います。

○参加者の声

- ・1人でごみ拾いをするとても心細いが、今回のように大勢で行うと充実感もあり、また参加したいと思えました。
- ・初めて歌舞伎町に足を踏み入れましたが、新しい社会の1面を知ることができ、今後ボランティア活動にもっと参加したいという思いが強くなりました。
- ・路上生活者に声をかけた人がいたが、相手が笑顔になっていたのが印象的でした。
- ・様々な年代、国籍、職業が入り混じって、一言では表せないディープな場所でした。

○担当者・記録

《担当》	神元 幸津江（いたばし総合ボランティアセンター）
	新部 聖子（スープの会）
《運営サポート》	笹沼 佑規（中央労働金庫）
《記録》	神元 幸津江（いたばし総合ボランティアセンター）
	杉村 郁雄（NPO 法人日本ファシリテーション協会）

29 地域と子どもと育ちあう場

○開催目的

少子・核家族化によって、地域のつながりをつくりにくく、子どもが育つ環境が変化しています。その中で、自分たちが暮らす身近な地域で、地域と連携をしながら、子どもが育ちあう場をつくる取り組みが行われています。

地域住民や親同士、行政との連携などさまざまな人たちとのつながりをつくって、地域と子どもが育ちあう場を考えていきます。

○開催日時

2月13日（土）14：30～17：00

○参加者数・出演者・団体

参加者数：16名（参加者9名、出演者3名、スタッフ4名）

出演者・団体：岡本 千栄子さん（NPO 法人こどもの遊びと育ちを支える会・こまえ 理事長）

幸野 知恵さん（NPO 法人こどもの遊びと育ちを支える会・こまえ 理事）

吉田 貴文さん（NPO 法人せたがや子育てネット 若者担当理事

/ せたがや子ども・ワカモノねっと）

○プログラム内容・成果と課題

1 開会・趣旨説明

2 登壇者からのお話し

- ・プレイパークって何？
なりたちと各地域での活動
- ・「狛江プレイパーク」について
これまでのあゆみと、活動への思い

3 フィールドワーク

オープン間近の狛江プレイパークを見に行こう！



4 参加者をまじえてフリートーク

～話し合われた主なテーマとキーワード～

○自己紹介、参加の動機、フィールドワークの感想

○ボランティアな活動、続けていく工夫は？

キーワード：仲間づくり、やりがい、お金のこと、
人のこと、活動を伝えていく必要性…

○地域の中でみんなの活動をするために

キーワード：リタイアした方、特技を生かして…、
多世代…、保育園・幼稚園との連携、一緒に地域を
創っていこう

○変えるのではなく、関わって一緒に変わる



◎成果と課題

地域でプレーパークの活動をする人、子育て関係の仕事や活動をする人、保育園に通う子どもの保護者、地域でボランティア活動をする人など、さまざまな参加がありました。

登壇者からプレーパークについて想いや苦労話を交えて聞いた後、オープン間近のプレーパークに足を運んだので、利用する人や地域の人へのさまざまな配慮や工夫を知り、それらが具体的にどのような形になるのかを体感することができました。また、地域の人々の理解や協力を得ながら、これから形づくられていくことも共有し、プログラム後半への結びになりました。

後半は、さまざまなバックグラウンドのある参加者自身の体験や悩みも織り交ぜながら、一つひとつについて登壇者と参加者とで一緒に考える形のフリートークとなりました。分科会のテーマである「地域と子どもと育ちあう場」について、特に地域の人との「関わり」について深めて話し合い、「変えるのではなく、関わることで一緒に変わっていく」という登壇者からの印象的な言葉もありました。参加者からは、「子育てに関わる人の横のネットワークづくり」など、プレーパーク以外にも具体的な形の提案もありました。

○参加者の声

- ・立ち上げの経緯から今の問題点まで細かく知り、他の方との話し合いまであり有意義な時間でした。
- ・プレーパークをスタートさせようとしているメンバー、すでにスタートさせている人これからチャレンジしようとしている人！何が必要で、何が大事か！具体的に形として見えてきました。
- ・保育を充実させる活動をしていますが、保育が広がるほど地域と子ども達と親が育ちあう場がどんどんなくなっていくという矛盾を感じています。保育所に預けているけれど、地域と関わりたいし、地域で育ててほしい。プレーパーク以外の形でも地域と子どもの育ちあう場があると思うので、考えるきっかけになればと思います。

○担当者・記録

《担当》 志田 五十鈴（こまえボランティア・センター）
栗澤 稚富美（公益財団法人社会教育協会 ひの社会教育センター
子育てカフェ「モグモグ」）

上田 英司（NPO 法人 NICE）
圓藤 理江（東京ボランティア・市民活動センター）
《運営サポート》 こまえボランティア・センターのみなさん
小杉 弘美（運営ボランティア）
森田 美穂（東京ボランティア・市民活動センター）
《記録》 栗澤 稚富美（公益財団法人社会教育協会 ひの社会教育センター
子育てカフェ「モグモグ」）

30 「靖国神社」を歩こう

○開催目的

TVや新聞のニュースに頻繁に登場する「靖国神社」ですが、意外に知られていないことが多いようです。このフィールドワークでは、靖国神社・遊就館やその周辺に赴き、靖国神社の昔と今について、自らの足でたどります。都心とは思えないほど静かで豊かな自然を残す場所で、過去と現在、そして、未来について考えましょう。

○開催日時

2月14日（日）10：00～15：00

○参加者数・出演者・団体

参加者数：17名（参加者13名、出演者1名、スタッフ3名）

出演者：宮沢 すばるさん（近現代史研究者）

○プログラム内容・成果と課題

1 プログラム内容

10:00 オリエンテーション（セントラルプラザ）
10:30 地下鉄で移動
11:00 靖国神社見学
11:30 昼食（海軍カレーなど）
12:00 遊就館見学
14:00 靖国神社見学
15:00 解散



2 成果と課題

・そもそも靖国神社とは？

靖国神社の前身である、東京招魂社ができたのは、1869（明治2）年6月29日。当初は京都に造られるはずでしたが、東京が首都になるのに伴い、東京で適地が探されました。これを積極的に行ったのが、長州藩出身の大村益次郎です。2009年は創立140周年にあたり、施設の修繕等が行われ、2019年の150周年にむけて計画が立てられ、募金等の動きが始まっています。

第一鳥居の手前に「靖国神社」の社号標が立っていますが、戦前は「別格官幣」という文字が刻まれていました。これは、天皇制と密接に結びつく社格制度での格付けを表すものですが、戦後、宗教法人になり、靖国神社の判断で切断されています。

靖国神社に祀られているのは国家の命令を受けて戦死した人です。他の神社では、祀られている人が増えるということはありませんが、靖国神社に祀られているのは、一人ではありません。合祀の前に、御羽車に載せた霊爾簿に魂をおろし（招魂式）、招魂斎庭からぐりと回って本殿へ運び、合祀します。一度合祀すると分祠は不可能だそうです。招魂斎庭は現在、時間貸しの駐車場になっています。

・遊就館と展示

1882（明治15）年2月25日に軍事博物館として開館。開館時の展示品は1111点、諸家出品41点。西南戦争の義援金の余りで造られました。展示は主に戦利品で構成されていました。1908（明治41）年9月落成の増改築を経て、1923（大正12）年の関東大震災で崩壊。その後、仮館で展示を続けましたが、1931（昭和6）年10月に現在の建物が落成しました。敗戦・占領を期に公開を取りやめ靖国神社宝物館となっていました。その後、大燈籠の献納者でもある富国生命が1946（昭和21）年より借り、事務所としていました。そして、外されていた「遊就館」の額が戻され、また改築工事を経て、1986（昭和61）年再度開館しました。2002（平成14）年には新館の増築と改修工事が行われ、展示も変わり、現在の展示、建物になっています。

「遊就館」の名は、中国の『荀子』にある、「高潔な人物に就いて交わり学ぶ」という一節から、「遊」と「就」を採ったそうです。その展示は、天皇を神とする皇国史観、東京裁判は勝者による一方的な裁き、という考え方に基いています。日本が行った戦争を、自存自衛、アジア諸民族を解放するためのものとしているのです。日本が行った植民地支配や、犠牲者についての言及はありません。遊就館は、軍事博物館ではなく、軍事PR施設である、と言えるでしょう。

国家のために戦死した「英霊」を顕彰する施設が遊就館ですが、再び「英霊」が生まれることのないよう、私たちは務めなければならないと感じました。

○参加者の声

・フィールドワークはセッティングが大変だと思いますが、大変良い経験を得ることができましたため、継続いただけるとありがたいです。

○担当者・記録

《担当》	鹿住 貴之（認定NPO法人JUON(樹恩) NETWORK） 中川 径治（NEC ネットエスアイ株式会社）
《運営サポート》	芦澤 弘子（聖学院大学ボランティア活動支援センター） 松下 知子（東京ボランティア・市民活動センター）
《記録》	鹿住 貴之（認定NPO法人JUON(樹恩) NETWORK）

31 「想いをかたちに」 出会いの広場

～民間助成金相談～

○開催目的

ボランティア・市民活動団体にとって、活動の充実や発展のために助成金は重要な財源のひとつです。しかし、助成金申請をしてもなかなか獲得することができないという声も聞かれます。

一方、助成団体の方からは、さまざまな団体の話を伺うことで、多様な活動の様子や地域の課題について把握したいという希望も聞かれます。

申請する側、助成をする側と出会い、ゆっくり話してみませんか？民間助成金の情報も展示しています。



○開催日時

2月13日（土）14：30 ～ 16：30

2月14日（日）13：00 ～ 15：30

○参加者数・出演者・団体

参加者数：28名（参加者10名、出演者14名、スタッフ4名）

出演者・団体：（敬称略・五十音順）

<相談協力団体>

公益財団法人キリン福祉財団、公益財団法人草の根事業育成財団、全労済、公益財団法人損保ジャパン日本興亜福祉財団、中央労働金庫、東京新聞社会事業団、公益財団法人トヨタ財団、NPO法人日本チャリティプレート協会、BunB東京スポーツ文化館、NPO法人モバイル・コミュニケーション・ファンド

<資料提供協力団体>

一般社団法人生命保険協会、一般財団法人世田谷トラストまちづくり、一般財団法人セブン-イレブン記念財団、東京厚生信用組合、公益財団法人どうぶつ基金

<企画運営協力>東京都社会福祉協議会民間助成団体部会

○プログラム内容・成果と課題

<プログラム内容>

- 1 助成金の申請に関する相談
- 2 助成金募集に関する展示・資料コーナー

東京都社会福祉協議会民間助成団体部会の会員団体をはじめ、民間助成団体の協力のもと、交流スペースとして、民間助成金の相談コーナーと募集情報コーナーを設けました。2日間を通して10の市民活動団体からの相談を、下記の民間助成団体の役職員が個別相談として対応しました。

相談内容は、各助成団体の助成金プログラムの応募要件に関する相談や、申請用紙の記入方法の相談など、具体的なやりとりもありました。また、どのような助成金が自身の活動に適しているかなどの資金全般のことや、申請を検討している事業に対する企画や広報のしかたなど、助成金の相談を切り口にしながら運営や活動の相談へと広がりを見せているときもあり、時間をかけて話し合い、交流しました。



<成果と課題>

日頃は直接話す機会の少ない、多様な活動に取り組む市民活動団体と多様な助成プログラムを実施する助成団体が、それぞれの対象分野や「想い」について話したり、聴いたりしながら、「想いをかたちに」するため、ゆったりと考える時間になったと思います。また、複数の助成団体が一緒に相談にのる場面もあり、助成団体がそれぞれの視点から話していくことで助成団体相互の理解につながるきっかけにもなりました。いろいろな立場の人たちが交流し合うフォーラムとして、この場はNPOと民間助成団体の出会いの貴重な場となっているため、今後も続けていきたいと思います。

○参加者の声

- ・ご担当の方と直接コミュニケーションできて、疑問や誤解を解消することができました。
- ・大変勉強になりました。
- ・助成金について「こんなに基本的なことを聞いてしまってもいいのかな」と最初、不安になりながら来たのですが、きさくな助成団体の方との話を通じて、もやもやとしていた部分がずっと晴れました。

○担当者・記録

《担当》	熊谷 紀良（東京ボランティア・市民活動センター）
	佐藤 亜弓（東京ボランティア・市民活動センター）
《記録》	佐藤 亜弓（東京ボランティア・市民活動センター）

32 ふれあい満点市場

～NPO・NGOの作品展示販売～

○開催目的

通販やインターネットで色々なモノが買えるようになった時代。みなさんが買おうとしているモノには、作り手の顔や想いが見えますか？

福祉作業所やボランティアグループ、海外協力の現場からサポートを必要とする人たちのために、また、必要とする人たちが自ら作成した作品を展示販売します。

○開催日時

2月13日（土）10：40～16：00

○参加者数・出演者・団体

参加者数：48名（出演者23名、スタッフ25名）

10団体・23名

幼い難民を考える会

ジャカルタ・ジャパン・ネットワーク

国際エンゼル協会

東京都青年団体連合

共同作業所かたくり

地球と友と歩む会/ LIFE

飛鳥会 つばさ工房

MHF

東京都知的障害者育成会

民間相談機関連絡協議会



○プログラム内容・成果と課題

「ふれあい満点市場」は、東京ボランティア・市民活動センター（セントラルプラザ 10 階）に常設された、福祉作業所やボランティアグループ、国際協力団体等の物品の委託販売スペースです。

インターネットではなく、顔と顔を合わせて「ふれあう」ことを大切にしたいという想いをこめています。しかし、実際に活動されている方とふれあう機会はそんなに多くはありません。そこで作り手の顔が見え、思いが直接伝わるように、活動に関わる団体の方々や作品を作っている方々と一緒に出展販売を行いました。

出展会場は、セントラルプラザ1階の区境ホールで、吹き抜けで明るく、人通りもあるオープンスペースです。そのためセントラルプラザへ来所された方や買い物にいらした方、単に通行された方も立ち寄っていただけました。

団体の方は商品についての工夫した点やこだわった点などを積極的に伝えたり、逆に団体の活動について尋ねる方もいらっしゃいました。そして、来所された方だけではなく、出展団体同士の交流の

場のひとつにもなっていました。

また、今年も都立新宿山吹高校の生徒のみなさんに多数ボランティアとして協力してもらいました。独自に看板を作成したり、チラシの配布等をはじめいろんな団体さんとの交流は貴重な体験となったようです。



○担当者・記録

- | | |
|----------|--|
| 《担当》 | 後藤 務（NPO 法人VCAS）
土屋 弦（明治大学）
小野 明子（東京ボランティア・市民活動センター） |
| 《運営サポート》 | 都立新宿山吹高校ボランティアの生徒のみなさん |
| 《記録》 | 小野 明子（東京ボランティア・市民活動センター） |

33 Open Café

○開催目的

フォーラム参加者、TVAC 来所者、ボランティア参加者とともに、くつろぎと交流のスペースをつくれます。

○開催日時

2月13日（土）10:00～17:30

2月14日（日）10:00～16:00

○参加者数・出演者・団体

スタッフとボランティア：15名

カフェ利用者：約500名（2日間）



○プログラム内容

フォーラム開催中、東京ボランティア・市民活動センターのフリースペースにて以下を実施しました。

◆休憩スペース（カフェ）の運営

- ・スペース利用者に、あたたかいお茶を提供
- ・スペース利用者やフォーラム参加者とのおしゃべり・交流
- ・参加者同士の交流のきっかけづくり

◆当日運営ボランティアの募集・受入等

- ・事前に web サイト等でボランティアを募集
- ・当日も随時、ボランティア希望者を募集・受入
- ・ボランティア参加者とともに、心地いい空間づくりを実施

○参加者の声

■ボランティア参加者「感想カード」

- ・学校やバイトとは違った経験ができました。
- ・面白かった。またやりたいです。
- ・はじめはとても緊張しましたが、すぐやりやすかったです。もっと長い時間できるなあと、思いました。
- ・とても素敵な体験ができました。なにより一緒にボランティアしている方がたに温まりました。
- ・すごく雰囲気がよく、楽しかったです。
- ・お客さんがお茶を飲んでなごんでいるのを見て、やってよかったと思いました。



- ・朝から笑顔がたくさん見られて嬉しかったです。
- ・1回ずつお茶を淹れ直さなければいけなかったのが、想像以上に大変だった。
- ・お客さんのにぎやかな姿を見て 素敵な体験でした。
- ・茶葉を袋に入れるのがとても難しかったですが、楽しくやることができました。

■カフェ利用者の声

- ・1杯ずつ、急須でいれてくれるなんて 嬉しいね～。
- ・美味しかったよ、ありがとう。
- ・去年も来ました。今年もお茶を楽しみに来ました。



■その他

- ・当日は、子どもから大人まで、多様な人たちが一つのテーブルを囲み、お茶やおしゃべり、折り紙などを一緒に楽しんでいました。
まさに一人一人が大切にされる温かい空間が、そこにはありました。

○担当者・記録

- 《担当》 森 玲子（東京ボランティア・市民活動センター）
上岡 夏海（白十字ホーム）
運営ボランティアのみなさん
- 《記録》 森 玲子（東京ボランティア・市民活動センター）



【作品展示】 みんなで作ろう！「明日のピース」

～ 障害のある方々とアート作品をつくってみよう！～

○開催目的

知的障害者の方々が日々過ごしていられる新宿区立新宿生活実習所では、アート活動やダンスなど、障害のあるなしに関わらず楽しめるプログラムを行っています。昨年秋に開催された施設のお祭りでは、地域の白線画家 猫沢八郎さんとともに、人型に板を切り抜いたものに絵付けをし、展示をしました。その名も“アミーゴくん”。スペイン語で「友だち」という意味です。

ボランティアフォーラム TOKYO2016 でも、アミーゴくんたちが手をつなぎあっているように、またお互いに寄り添うようなイメージで展示をし、その活動をご紹介します。

分科会 No.20「みんなで作ろう！『明日のピース』～障害をもつ方々とアート作品をつくってみよう！～」と連動しています。

○開催日時

2月12日（金）19:00 ～ 2月14日（日）17:00

○作者

新宿区立新宿生活実習所のみなさん

○プログラム内容・成果と課題

作者たちの個性がそれぞれのアミーゴくんに出ており、会場も楽しく賑やかな雰囲気になりました。

分科会 20 との連動企画なので、その分科会に参加された方々に興味を持っていただくことができ、また、広くフォーラム参加者にも障害のある方々の日頃の活動を見ていただくことができました。

○参加者の声

- ・ロビーや通路などの展示は、とても楽しい雰囲気でした。

○担当者・記録

《担当》 新部 聖子（スープの会）



【作品展示】 2020 年、東京パラリンピックに

向けたムーブメント

○開催目的

2020 年、東京オリンピックに続いてパラリンピックが開催されます。この大イベントに向けて東京はどのように変わっていくのか。街中や駅などが整備されてバリアフリー化がより進むのではないのでしょうか？

ボランティアフォーラムに参加の皆さんに少しでも関心を持っていただけるようにパラリンピック関連で活動している団体の展示を行います。

○開催日時

2月12日（金）19:00 ～ 2月14日（日）17:00

○展示団体

- ★東京ボッチャ協会
- ★ハンドスタンプアートプロジェクト

○プログラム内容・成果と課題

<展示内容>

東京都が作成したオリンピック&パラリンピック関連のグッズ展示や、パラリンピック競技種目である「ボッチャ」、パラリンピックに向けて活動を行っているボランティア団体「ハンドアートスタンププロジェクト」のパネル展示。

<成果>

パラリンピック選手の絵葉書などを持ち帰ることができたので立ち寄る人は多く、参加された方々のパラリンピックへの関心度が高いことがわかりました。

<課題>

パラリンピックの資料がさまざま集まる予定でしたが、同時期にパラリンピック関連のイベントが重なりパネルを貸し出していただけなかったため、展示の規模を縮小せざるを得ませんでした。今後注目を浴びる内容であり、効率の良い運営が重要であると思います。

○担当者・記録

《担当》 鈴木 正昭（りすこ〔おおた復興支援活動連絡協議会〕）



市民社会をつくるボランティアフォーラムTOKYO2016 プログラム別参加者数一覧(述べ数)

開催日	分科会テーマ	参加者	出演者	スタッフ	合計
2月12日	1 『社会福祉法人』は変わるか！？	26	4	6	36
	2 沿線であつたろう！～地図で見るとなり街のボランティア～	14	7	4	25
	3 企業人ボランティア交流会 ～会社の内外でネットワークしよう！～	29	4	3	36
	28 ごみ拾いから見る社会課題 ～夜の新宿・歌舞伎町へ～ (フィールドワーク)	18	1	3	22
2月13日	4 オープニング ～あしたのピースって？～	49	3	5	57
	5 『ゼノ・かぎりなき愛に』映画から考える平和の大切さ	10	1	4	15
	6 現代の貧困～まずは知ることから始めよう～	29	2	4	35
	7 “罪を犯した人”の背景をひもとく！ ～その背景から、わたしたちの地域や暮らしを考えてみよう～	24	3	4	31
	8 健聴者が気付かないコミュニケーションの壁 ～聴覚障がい者の社会環境を考える～	28	2	3	33
	9 学生に「また来たい」と言われたい ～学生×地域×大学で考える学生目線のボランティア～	31	4	4	39
	10 「東日本大震災から5年」そしてこれから	32	7	3	42
	11 パレスチナ問題を若者たちと語り合しましょう	24	4	4	32
	12 物質的豊かさとの貧困 ～ツーリズムから見る現在社会～	24	2	3	29
	13 「はじまりの物語」～セルフヘルプグループから「私たち」へのメッセージ～	29	5	5	39
	14 「do-ing(動員)」の力学を知ろう ～自主性ある地域活動をめざして～	17	2	3	22
	15 ボランティアを通じて学生の生きる力(社会性・自己肯定感)を育てる	20	2	3	25
	29 地域と子どもと育ちあう場 (フィールドワーク)	9	3	4	16
	16 交流会	84	30	9	123
2月14日	17 私の、私たちににとっての家族のかたち ～「家族」って何だろう？ 映画『うまれる ずっと、いっしょ。』から～	37	0	3	40
	18 非営利組織とお金 ～出し手と受け手の「意志」をひとつに～	21	4	3	28
	19 2020年、東京パラリンピックに向けたムーブメント	29	3	4	36
	20 みんなで作ろう！「明日のピース」～障害のある方々とアート作品をつくってみよう！～	16	2	3	21
	21 外国にルーツを持つ子どもたちのキャリアを考える	26	2	3	31
	30 「靖国神社」を歩こう (フィールドワーク)	13	1	3	17
	22 “家族のかたち” “地域のかたち” の今	23	2	4	29
	23 ソーシャル界の“スティーブ・ジョブズ”ここにあり ～ITテクノロジーによる社会課題解決～	19	2	3	24
	24 多様な非営利組織で働く多様な人びと ～NPOの価値を問う～	28	5	7	40
	25 “きょうだい”Cafe ～語り合おう、障がい者のきょうだいのこと～	35	4	2	41
	26 中学生・高校生、施設・団体と地域をつなぐ	69	0	10	79
	27 クロージング ～みんなでつくる あしたのピース～	61	2	3	66
13日・14日	31 「想いをかたちに」出会いの広場 ～民間助成金相談～	10	14	4	28
2月13日	32 ふれあい満点市場 ～NPO・NGOの作品展示販売～		23	25	48
13日・14日	33 Open Café			15	15
12～14日	作品展示：みんなで作ろう！「明日のピース」 ～障害のある方々とアート作品をつくってみよう！～			5	5
12～14日	作品展示：2020年、東京パラリンピックに向けたムーブメント			1	1

* スタッフは、実行委員、サポーター、運営スタッフ、運営ボランティア等を含む

884 150 172 1206

市民社会をつくるボランタリーフォーラム TOKYO2016 実行委員会名簿

●実行委員

氏 名	所 属 団 体	
芦澤 弘子	聖学院大学ボランティア活動支援センター	
栗澤 稚富美	公益財団法人社会教育協会ひの社会教育センター 子育てカフェ「モグモグ」	
市川 徹	沿線ボラセン交流会	
上田 英司	NPO法人NICE	実行委員長
内田 智子	認定NPO法人ESAJIAアジア教育支援の会	
枝見 太朗	一般財団法人富士福祉事業団	
鹿住 貴之	認定NPO法人JUON（樹恩）NETWORK	副実行委員長
上岡 夏海	白十字ホーム	
神元 幸津江	いたばし総合ボランティアセンター	副実行委員長
川上 侑希子	東京大学大学院 教育学研究科	
笹沼 佑規	中央労働金庫	
志田 五十鈴	こまえボランティア・センター	
高橋 義博	調布市市民プラザあくろす 市民活動支援センター	
田口 まゆ	NPO法人Serenity	
中川 径治	NECネットエスアイ株式会社	
中野 宏美	NPO法人しあわせなみだ	

●サポーター

氏 名	所 属 団 体	
阿部 恵美子	調布市市民プラザあくろす 市民活動支援センター	
遠藤 信裕	なぎさ和楽苑	
小川 美佐子	NECネットエスアイ株式会社	
後藤 浩二	スーパの会	
後藤 務	NPO法人VCAS	
柴田 健次	東京都社会福祉協議会	
杉村 郁雄	NPO法人日本ファシリテーション協会	
鈴木 正昭	りすこ（おおた復興支援活動連絡協議会）	
高橋 沙織	みたかボランティア・センター	
辻 陽一郎	國學院大学ボランティアステーション	
土屋 弦	明治大学 法学部	
新部 聖子	スーパの会	
松本 裕也	ヤフー株式会社	
宮崎 雅也	日野市ボランティア・センター	
柳澤 更沙	明治大学和泉ボランティアセンター	
山本 智子	認定NPO法人パレスチナ子どものキャンペーン	

50音順・敬称略

●事務局

氏 名	所 属 団 体	備考
長谷部 俊介	東京ボランティア・市民活動センター	
熊谷 紀良	東京ボランティア・市民活動センター	
高橋 紘之	東京ボランティア・市民活動センター	主担当
岡部 沙耶	東京ボランティア・市民活動センター	副担当
圓藤 理江	東京ボランティア・市民活動センター	副担当

市民社会をつくるボランティアフォーラムTOKYO2016 プログラム別担当者一覧

開催日	分科会テーマ	主担当	副担当
2月12日	1 『社会福祉法人』は変わるか！？	柴田健次	上岡夏海 宮崎雅也 新部聖子 熊谷紀良
	2 沿線でつながろう！～地図で見るとなり街のボランティア～	市川徹	阿部恵美子 柳澤更紗 高橋義博
	3 企業人ボランティア交流会 ～会社の内外でネットワークしよう！～	中川径治	鹿住貴之 河村暁子
	28 ごみ拾いから見る社会課題 ～夜の新宿・歌舞伎町へ～（フィールドワーク）	神元幸津江	新部聖子
2月13日	4 オープニング ～あしたのピースって？～	上田英司	鹿住貴之 志田五十鈴
	5 『ゼノ・かぎりなき愛に』映画から考える平和の大切さ	枝見太郎	阿部恵美子 鈴木正昭
	6 現代の貧困～まずは知ることから始めよう～	神元幸津江	内田智子 杉村郁雄
	7 “罪を犯した人”の背景をひもとく！ ～その背景から、わたしたちの地域や暮らしを考えてみよう～	宮崎雅也	川上侑希子 新部聖子
	8 健聴者が気付かないコミュニケーションの壁 ～聴覚障がい者の社会環境を考える～	高橋義博	上岡夏海 岡部沙耶
	9 学生に「また来たい」と言われたい ～学生×地域×大学で考える学生目線のボランティア～	芦澤弘子	遠藤信裕 辻陽一郎 土屋弦 柳澤更紗
	10 「東日本大震災から5年」そしてこれから	鈴木正昭	枝見太郎 宮崎雅也
	11 パレスチナ問題を若者たちと語り合ひましょう	中川径治	山本智子
	12 物質的豊かさと心の貧困 ～ツーリズムから見る現在社会～	内田智子	神元幸津江 後藤浩二 小川美佐子 杉村郁雄
	13 「はじまりの物語」～セルフヘルプグループから「私たち」へのメッセージ～	後藤浩二	田口まゆ 圓藤理江 杉村郁雄 森玲子 安井忍
	14 「do-ing（動員）」の力学を知ろう ～自主性ある地域活動をめざして～	市川徹	後藤務 高橋沙織
	15 ボランティアを通じて学生の生きる力（社会性・自己肯定感）を育てる	芦澤弘子	遠藤信裕 辻陽一郎 柳澤更紗
	29 地域と子どもと育ちあう場（フィールドワーク）	志田五十鈴	栗澤雅富美 上田英司 圓藤理江
	16 交流会	土屋弦	芦澤弘子 川上侑希子 高橋義博 辻陽一郎
2月14日	17 私の、私たちにとっての家族のかたち ～「家族」って何だろう？ 映画『うまれる ずっと、いっしょ。』から～	志田五十鈴	栗澤雅富美 中野宏美
	18 非営利組織とお金 ～出し手と受け手の「意志」をひとつに～	笹沼佑規	内田智子 熊谷紀良
	19 2020年、東京パラリンピックに向けたムーブメント	鈴木正昭	阿部恵美子 上岡夏海 高橋義博 土屋弦
	20 みんなで作ろう！「明日のピース」～障害のある方々とアート作品をつくってみよう！～	新部聖子	柴田健次 宮崎雅也 熊谷紀良
	21 外国にルーツを持つ子どもたちのキャリアを考える	上田英司	小川美佐子
	30 「靖国神社」を歩こう（フィールドワーク）	鹿住貴之	中川径治
	22 “家族のかたち” “地域のかたち” の今	栗澤雅富美	志田五十鈴 新部聖子
	23 ソーシャル界の“スティーブ・ジョブズ”ここにあり ～ITテクノロジーによる社会課題解決～	中野宏美	枝見太郎
	24 多様な非営利組織で働く多様な人びと ～NPOの価値を問う～	神元幸津江	内田智子 笹沼佑規 高橋義博
	25 “きょうだい”Cafe ～語り合おう、障がい者のきょうだいのこと～	川上侑希子	高橋沙織 新部聖子
	26 中学生・高校生、施設・団体と地域をつなぐ	後藤務	遠藤信裕 土屋弦 小野明子
	27 クロージング ～みんなで作る あしたのピース～	上田英司	鹿住貴之 神元幸津江
13日・14日	31 「想いをかたちに」出会いの広場 ～民間助成金相談～	熊谷紀良	佐藤亜弓
2月13日	32 ふれあい満点市場 ～NPO・NGOの作品展示販売～	後藤務	土屋弦 小野明子
13日・14日	33 Open Café	森玲子	上岡夏海
12～14日	作品展示：みんなで作ろう！「明日のピース」 ～障害のある方々とアート作品をつくってみよう！～	新部聖子	
12～14日	作品展示：2020年、東京パラリンピックに向けたムーブメント	鈴木正昭	

<協賛・協力>

◆特 別 協 賛

中央ろうきん社会貢献基金

東京ロータリークラブ

公益財団法人 原田積善会

株式会社三菱東京 UFJ 銀行

◆協 賛

NEC ネットエスアイ株式会社

公益財団法人 損保ジャパン日本興亜環境財団

トヨタ自動車株式会社

NPO 法人 モバイル・コミュニケーション・ファンド

◆協 力

株式会社ガイア

全労済

東京新聞社会事業団

市民社会をつくるボランティアフォーラム TOKYO 2016 報告書

〈発行〉 市民社会をつくるボランティアフォーラム TOKYO 2016 実行委員会
事務局 東京ボランティア・市民活動センター
〒162-0823 東京都新宿区神楽河岸 1-1
TEL 03-3235-1171 / FAX 03-3235-0050
<http://www.tvac.or.jp>

〈発行月〉 2016 年 4 月
